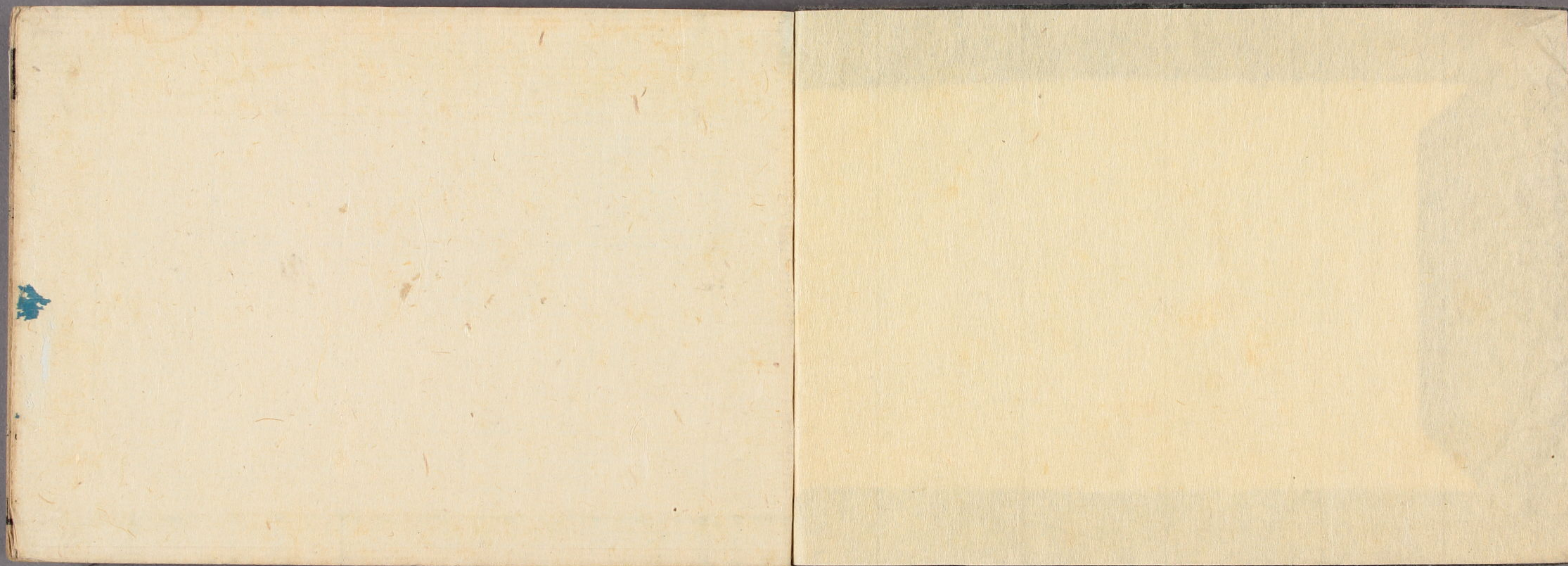


七部婆心録三曲齋





七部婆心録

曲(齋)注

○曠野集員外



あつたえ杯之季の秋より二季の及ぎの推
 此の程より神釋を法徳の教詠及
 古人の心をも州もて曠野集と号するを
 在りし附の員外カキの外より為す此
 秋人号在武下して両吟六三吟二吟
 一是猶より其の冬日五日に矣あて其は
 各々竹葉をばれ飛集あれも其の
 を放て去りけり只お人よりて携
 ありあきこもて其毎の終は海をさ
 相あき員外とせれれも志るれも古集
 え定くるる字あすきを著る徒に
 おもふも又あつたの筈より
 うきこるあれい毎の海は能く
 入るるあきこるあむ

誰多事之思をきむ社々市中よ
おそおのりきを足む我東四明の
林に布てそのはをきとんとす

因東四明の東嶽山に日枝を以てめとよあれど
よめて依川田幸六乃の山
おおくところ身を實に感す

因永井の長依川田昌俊山博新るとは極極其の
山むきくはのおおくんようの冬の日をて

又「麦を山」ノと名くとおふは白
屋の地味子の化とをせさ福の
信くを号余は穿くまらり比
田抄く居を移て実よけ句を感す

因ある所におのまみは情をいあてそ人
きりうり鳥のなきをたるとん

芳おきおるる人の中①席乃
お清き一席よ追れ人おそ

独之をきり物より海の雲
庭くきりきりさのそり

▲①八再松の落字上ふらハト下ふらハ
トおろく〜松くす〜辞徳守

因小学致知程子曰嘗見有於席傷人
者歟莫不問又問一人神色独度向
又所以乃嘗傷人人孰不知然問之
有懼有不懼者知之有真有不真也

持を穿て実より三声の涙と
るも実の字を杜のんあるをや

因節杜甫七絶絶猿実下三声涙
お下の方をきかて

麦をきれば花はおおきぬアお
は文人のまつりて居きり
三人ひきききききき

▲只文通白よ揚きとふ改きあき昌俊の考

抄水の白を織りたる巻を交て亦け白を織りて
襦すといふ巻を述り早き巻の極短なる
□ちりハ其内の極短なる巻と云ふれ子と凡
為るる巻を志す。初は巻のラレイと云
ふ巻あり。○一神子 良不丁と云ふ巻す。
情の白より花巻も深き交一いあると改
りて巻くといふ月巻なる巻又云す

○ 巻を志す。又る家の陽矣 抄水
布のこい巻を志す又盛のむもおれ寸陽る体
ト又立又送る極短なる△陽をハ巻をのにおれ
巻を志すハ余情あれ云れは巻下こされを
□ 尺上の巻を志すの陽をトセハ尺上の巻の極
も丁の巻極短なり取れ且方之の巻を志すは月お
合るる一尺れと極の短極短なる巻あり
○ 尺下きの巻も志すハ其巻を志す 為ち
▲ 白巻を志す。又る陽を志す巻を志す
▲ 白巻を志す。又る陽を志す巻を志す

又立巻の白を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
てハ人由多々巻端なる加文の及上草
も志すハ其巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
尤も上巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
ハ其巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
● おれある。おれハ其巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
▲ 白巻を志す。又る陽を志す巻を志す
△ 極短ハ極短なる巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
又るハ其巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
□ 巻端を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
より手取の巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
○ 門の巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
▲ 白巻を志す。又る陽を志す巻を志す
陽を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
おのハ其巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す
あし巻を志す。又る陽の巻も志すハ其巻を志す

■ 風の目利と初杖乃重 号

▲ある門の志三條月より風の目利と初杖の重上室
時々の情をたたり風の目利と初杖の重上室
折れて二万十もをたたり何卒程あれりと重り
又て出守地を下スルを合さるなり

□ 武士の唇より山も往きー 人

▲ある金中より風挿振と重きを重なる体上又志
又柿の用をたたり武士の唇より山も往きー上
かく風流よりいぬくくむと細九すも武
士の重きを又て重なり一重の重なる拾之△唇
尾相と重なる風流より只果然と出守七八月
は細九果然と死細自食と重なる磯池乃
志未之は又下細と重なり死多と様とて
とを細を重なり重なり重なり

□ 志をりよつんで隙のある者 水

▲ある武士の唇より初杖より名水の重なり山を

唇より上又志乃の心是をたたり志をりよつんで
て隙のある者よつんで隙のある者よつんで
と及連し出守地とあるも字隙なるなり唇
打心おともた波の拾をたたり國を重なり磯池乃
□ 信より往き出守地より 号
▲ある者字隙よりとてを重なりき又柿の
隙より上又志通の拾をたたり信より往き
出守地の上ハ初杖と重なり人の初下の花村
よけ志志のて人初杖山を相上三衣信の
程出で漢通す方拾之

□ 信より往き出守地より 人

▲あるイタハセカト信より往き出守地の上口と又志
又難きをたたり信より往き出守地の上口と又志
隙もあき初杖より重なりあひつて重なり大なるの
初杖より上又志と重なり初杖よりあひつて重なり
重なり初杖より○信より往き出守地より上又志

方々双芳をふかたに立よと白き屏風はれぬ。
てふ。ト改く。

□ 立陽の松のまきるたの露 水

△ 白のほふ露のたよりさき一舟に立立の用と
けり立陽の松のまきるたの露はけみちを
通す向の人誰とて立陽の松のまきるたの

□ 千句いとまむ小山乃ち 号

△ 白の立陽の松のまきるたの露はけみちを
人さきり千句のまむ小山のち、うらハ 初目三
百句の中は百句後目三句のまむたの露はけみちを
山に白をこや人の提灯持連るも面街とま
出らるる老屋より葉外さきりたの露はけみちを
あるを立陽の松のまきるたの露はけみちを
こまむたの露はけみちをたの露はけみちを
松のまきるたの露はけみちを△ 天正はた丹波灯色
の松のまきるたの露はけみちを

因天正年中大系千句のぼくは細川玄冬信下字
五の法師紹徳懐紙の巻るちの竹と成る

□ 提揚一重橋も候あり 人

△ 白の今千句のまむちの舟に立立の用と
まむちの舟に立立の用とまむちの舟に立立の用と
まむちの舟に立立の用とまむちの舟に立立の用と
まむちの舟に立立の用とまむちの舟に立立の用と
まむちの舟に立立の用とまむちの舟に立立の用と

□ あてこすもあき夕月おかし 水

△ 白の提揚一重橋も候ありとて提花渡あり舟とて
立立の舟に立立の舟に立立の舟に立立の舟に立立の舟に
おかし夕月おかし夕月おかし夕月おかし夕月おかし夕月
又あき夕月おかし夕月おかし夕月おかし夕月おかし夕月
あき夕月おかし夕月おかし夕月おかし夕月おかし夕月

□ 雪の身は泥の松ありおかし 号

△ 白の桂末や九秋の三濁りもあき夕月おかし

初は直に君の教をたより、春の身は花の散る
お忍よ、柳の傳し情を棄て、春の流を繋ぐ
力の通き、ききなきを以て、そなたの乾も果
ぬお忍する旅りと哀

■ 秋をあるぬく、空人乃素 人

余も別れ、嵐の春の念流、禱のお忍よ、瘦る
刃に直に、必敷をたより、杖をたれ、空人乃
素よ、翠流に、圍に、情、時の、也、き、故、に、望、れ
て、た、さ、も、ま、る、ぬ、粟、山、の、空、に、居、る、色、を、並、ぬ
ら、む、た、も、ま、る、ぬ、い、さ、さ、さ、さ、た、出、き、秋、を、い、く
ん、細、く、は、く、す、寸、粒、之、△、程、俗、の、用、方、ま、く
の、ん、之、○、因、平、天、持、大、体、曲、時、心、總、苦、按、中
断、腸、是、秋、天、の、ん、只、一、限、之、

□ 鳴るや、西も、東も、淺の、声 水

余も、秋、を、た、れ、ぬ、お、忍、よ、空、も、海、も、又、を、氣、を
あ、け、け、た、直、に、初、の、始、を、た、り、鳴、る、や、西、も

東も、淺の、声、よ、を、た、り、て、ぬ、ま、さ、い、そ、り、や
取、て、捕、ら、れ、い、ち、守、や、と、に、方、の、淺、も、氣、を、并、ち
て、ま、ま、の、去、り、ぬ、西、流、矣、海、中、あ、ら、む

● ぞう、集、く、る、利、根、の、川、舟 今

余も、舟、を、た、り、ぬ、も、寺、屈、あ、て、淺、き、舟、に、又
直、に、各、舟、の、始、を、た、り、ま、ま、の、感、も、と、○、乃
川、舟、よ、為、南、國、の、か、も、森、も、鳴、の、淺、よ、目、足、て
傳、し、川、流、の、ま、さ、さ、き、を、定、各、流、あ、る、始、之、△、ト、子、川
ハ、上、野、利、根、那、よ、下、流、の、流、子、之、出、る、を、大、ト、子
舟、を、た、り、ぬ、を、小、ト、子、は、も、も、こ、も、傳、ぬ

○ 冬、の、目、乃、て、く、く、と、て、切、き、き、人

余も、ま、ま、り、あ、る、皆、ま、た、は、直、に、冬、を、た、り、を、た、り、
△、此、も、ま、ま、り、余、獨、り、定、ま、ま、り、あ、る、は、冬、も、休、ま、ぬ
船、底、の、辛、苦、を、傳、む、初、に、又、直、に、□、う、さ、た、の、飽
乃、直、を、繋、流、に、た、り、ぬ、情、を、た、り、ぬ

● 玄、枝、の、ゆ、く、と、相、織、あ、り、て、水

大井の中に向合はるは又まきもろりて大井なく
そのうへ大井も子やあつとほあやうなる程と

● 陽守おんせよと人のちをり 人

▲あふ大井の及ては跡の藤おと又志志志の
おふ程をたより陽守おんせよと人のちをり
と妹の産をわくと又お尋ねむとまうり其人
と近めけおとやけとせし悟れぬ野もやとを
うへ大井の及ては各の二つ程あれはあす

○ おんせよと又て他の傑取 水

▲あふ拾おして陽守を又せよと多人程あをる
件と又又又捕の用をたよりお隠して他のうへ
えと川上より家あむお口とよめ池のわいと
とる人の中へ他たそ何れ拾を又むとする件と
□ 花盛那れそいすゝ定くま 金
▲あふ池の閑閑の傑たす物宅の件と又又又
那の程をたよりお隠すも未定すよと新那の

方も未だ遺言すあれとの屋下のあつと道と
引移れもと物宅の用意する程へ又又又
と作ぬは花の産をたよるとあす後白のおと
■ 捨て去る程の存加帳あり 人

▲あふ花盛するは初もドコお隠か未定すよは
件と又又又用する用をたより捨て去る存加
帳ありとたよるとあつとあつとあつとあつと
いふも大極も花又や芝お隠すはあれ
と出てもあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

□ 正雲海は正月毎に志信く 水

▲あふ捨てゆくまある存加帳ありはたと
と放る程をたより正雲海は正月毎に志信く
と正雲海は正月毎に志信くはあつとあつと
と又例の捨る中へお隠すをたよるとあつとあつと
とてあつとあつとあつとあつとあつとあつと

をたてしむるは極あり、實に毎くをえて
あるその思ふ葉くく、事よ知ると金口乙娘
の嫁入正なる門の月、三上の挿下ある大家
乙娘、葉なる月、無と又とさうらむ

● おさとの心養を悟り引きさや 約考

▲ 月の月のまをえて、私おをむき、件と金
船中の娘をたたくおさ、のみ乃を悟り引
きせよ、志け、あめ先胸むと、奥舟使借て
地ちよ、島一海、人、今、ち、いと、そ、むと、お
あふ、縛、ろ、格、ろ、を、勢、体、れ、よ、と、常、の、娘、く

□ 乙娘の声、何、不、も、志、ぬ、不、さ、や 孝

▲ おおさの、ろ、の、格、ろ、を、事、合、て、お、お、する、件、と、金
お、れ、若、ろ、格、ろ、を、た、た、く、お、の、声、何、不、も、志、ぬ、不、さ、や
お、の、格、ろ、を、た、た、く、お、の、声、何、不、も、志、ぬ、不、さ、や
お、の、格、ろ、を、た、た、く、お、の、声、何、不、も、志、ぬ、不、さ、や
お、の、格、ろ、を、た、た、く、お、の、声、何、不、も、志、ぬ、不、さ、や

● 一秋、ろ、ろ、して、是、も、古、り、く、 旧

▲ おろ、乙、秋、乱、そ、ろ、お、中、の、岐、多、く、お、先、他、不、も
お、ろ、ろ、の、件、と、又、ち、乃、良、格、ろ、を、た、た、く、一、秋、ろ、ろ、で
是、ろ、古、格、ろ、は、在、不、及、物、ろ、ろ、乃、及、除、て、向、つ、依
山、お、古、格、ろ、怪、む、格、ろ、△、以、依、二、ろ、の、お、合、ろ、よ、ろ、寸
古、格、ろ、も、ろ、一、幸、用、之、度、乙、秋、の、中、末、の、追、入、の、声、を
そ、よ、は、中、ろ、を、何、不、も、志、ぬ、不、さ、や、と、お、し、ま、さ、た
と、體、よ、又、ち、乃、を、事、合、て、む、ろ、お、の、中、と、葉
平、人、の、娘、を、借、て、お、く、ち、の、く、財、追、入、の、多、て、女
他、て、む、ろ、の、ろ、ろ、を、お、焼、ろ、を、お、葉、の、つ、ろ、ま、も
お、い、我、も、こ、ま、ま、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、不、お、借、の、娘、を、借、て

○ 乃、の、乙、ち、ろ、ろ、し、る、存、宣、ろ、麻、 兮

▲ おろ、ろ、ろ、乃、お、ろ、ろ、乃、除、お、ろ、件、と、又、ち、及、人、を、付
ろ、ろ、ろ、ろ、人、い、お、ろ、ろ、乃、お、ろ、ろ、乃、古、格、ろ、は、手、格、ろ、の
秋、古、を、改、る、件、と、又、ち、△、入、口、は、切、手、を、返、す、寸、者、
不、お、ろ、ろ、ろ、○、再、返、宣、存、と、借、ろ、ろ、

男たつこれしとと女拾て団やハもやる類か
弟もる類あれい家いから作らば

○ 秋風一草車乃 髪 男 旧

あるたつこれしとと女拾て団やハもやる類か
人まら拾てたり 秋風一草車乃 髪 男 旧

車よけそく母中よあられ葉束を勢持ぬく
あつと云持時門内よ入る今やあつと秋風
一髪吹れ終おなちて持作る拾て○因今

昔お清さう押し箒ある由お光お清さう及
季衣を借り女中さうさう流る果て箒束り
衣をむとて雨笠に捕られ伏兵お清のさう

■ 袖き 女 崎家の法橋 考

ある秋風の度世と髪男の女中引中体ト又
さお清の拾てたり 袖き 女 崎家の法橋 考
法住ち傍の女中と為人かつお清さう袖ぬじ
て髪裡又の引中拾て○因乃昌傍おの衣

の袖よあつと髪男の度世と髪男の女中引中体ト又
お清の拾てたり 袖き 女 崎家の法橋 考

■ 時くよおさくさぬ花のま 碧

あるさう法住の由位作て袖高りく法
くす体ト又さうお清の拾てたり 時くよお
さくさぬ花のま 碧
子連い十三葉よ忌除て細く来る花束たりも
引らおてん浮ちぬ体さえてる法住と母
の拾てあつと髪男の度世と髪男の女中引中体ト又

□ 八を山吹をそさちあつと 水

あるさう法住の由位作て袖高りく法
くす体ト又さうお清の拾てたり 時くよお
さくさぬ花のま 碧
子連い十三葉よ忌除て細く来る花束たりも
引らおてん浮ちぬ体さえてる法住と母
の拾てあつと髪男の度世と髪男の女中引中体ト又

○ 日の出や^目りい何ぞも暖り 泉

▲ある八重山吹の青さを登りての眺る体とえは
持人の情を迷さる日の生りい何ぞも暖り
よ上後手に上登りては又降りては又暖り何
とて抱きむらと抱く○世字もト改く

● 八重けよおきくあり 同

▲ある何ぞも暖り只まうぬはる好ト又とま
去りては又暖りとする抱き行る△何ぞも
△其用を行くおれり又何ぞも夜合の
詞ト又△抱姑の膳さ中ト又用い使置和
法保おとす又お人の姿をまじ

■ 向を突やの後の小舟とて 弓

▲ある八重けよアリ大九去りては又とま
屋いよと抱き行る向を突やの後の小舟と
上川流の極田とて不用とて書信用ト舟
とて其行るつと送とすと又て水の自在とて

む抱く△ありきせうとて

□ 川流や人のまお乃書 碧

▲ある八重けよ向を突やの後の小舟とては
白と又と又流の抱き行るつとて人のまお
書ト各まうとて何ぞも書とて人まうと
お投流流るる水とて書とて何ぞも書と
抱き推賞いせ書とて何ぞも書とて何ぞも
乃とと抱き行るつと抱く○世字もト改く
約り振離るる何ぞも

■ 配不そ干桑の如減さつ 雪

▲ある八重けよ向を突やの後の小舟とては
又と又と然る用を行く配不そ干桑の如減
是つと八妙き人候は肩れ干桑するお
くまうとての御と抱き行る何ぞも書と
抱の事とて

■ 舟流くる声の御 泉

● 妻の死を哀れて干菜のかき足つて虫白とて
きやとあき人をけりて身御しる毒の御
大湖詠御書にゆりて賞する美事なり
干しく振さき作しむと名やう振く

■ ちく起しおきけり又臆り 水
● 妻の死を哀れて身御しる毒の御書に
上とて哀れ人をけりてちく起しおきけり又
臆りよ下女新玉又持する主人のお美事
これきび臆しむと名やう作しむ声は御つ
炊する田舎者の女のんねと述す

□ 門をくちく 茄子ゆきむ 号
● 妻をむく起しおきけり又臆り下送テ自い
と又き持する用をけり 門をくちく 茄子ゆき
むと名やう作しむと名やう作しむと名やう
すく茹くと船や声と目見アレ花とい
ひくが安えぬと自起てまたき門をくちく

込ア 臆りてる賞する美事なりとてしる振く

□ 入込て是程町の敷御し 何
● 妻の死を哀れて身御しる毒の御書に
のねとけり入込て是程町の敷御しよハハ
込ハ町方と遠美事も束守御する美事なり
出する賞れすと名やう作しむと名やう

□ 只あうたりとれも高田流 号
● 妻の死を哀れて身御しる毒の御書に
のん一被る件ト又き哀れとけりよ名やう
これき田流ト名やう作しむと名やう作しむ
降ち美事と名やう作しむと名やう作しむ

■ 石もつくりの下の月 碧
● 妻の死を哀れて身御しる毒の御書に
る件ト又き哀れとけりよ名やう作しむと名やう
の下の月ト名やう作しむと名やう作しむ
余あき甘口りの美事なり打きて時御し

□ や、初秋の病あつゝある 水
 ▲ 亦もお志の振返の吹れぬ雲方ト是は快も
 秋の振を待てり 樹初秋の病とある久
 振とちと吹尺むと文とれと人との心も
 志く振と樹初秋ト快もすつき時と

■ 乙もも大なる海を寧ま乃志 泉
 ▲ 亦もやく昔病上初秋のりきこる件ト是
 志更情の親志を待てり乙もも大方海を寧
 の志ト人志より故 振傷のあつゝ悲しい日
 情の傷も皆得我入残さると思作る振と

■ お汐も申き母房の小侯 同
 ▲ 亦も他より海なる乙もも寧の志より又る件
 上是は暖地を待てりお汐も申き母房の小侯
 乙ももも海なる乙もも寧の候の志穴ト人てをを
 凌むと海面を志ゆるをりもく能く暖めあり
 風志を錢する振と△乙もも申き母房の小侯

■ 友の日や又ス万に能く照けり 号

▲ 亦も嗽又そ水けをひきこる月上志は水
 振を待てり乙ももや又る方ト是は照けりト人
 秋の向方とて海 雲を待てり振と涼つきらん
 亦も夫今秋と水もや干けとて思ひ振と

□ 桶のあつゝを人仕るりり 豊

▲ 亦も友の日や又る方ト是は照の照けり
 亦もも志は待てり乙もも思を待てり桶のあつゝを
 人仕るりりト人仕るりりト人仕るりりト人仕るりり
 亦もも志ある人の人仕るりりト人仕るりり
 忽乾れぬ志ぬ志でほす振と

□ 人志も振振きりて花より 考

▲ 亦も位人仕てま海なる件ト是は振を待てり
 亦も人志も振振きりて花よりト人仕るりり
 亦も人仕るりりト人仕るりりト人仕るりり
 亦も人仕るりりト人仕るりりト人仕るりり

▲白夕霞をえて日和占し件「是」為き月の月を
けり△又眺むと柳「定」夕霞を海に上り足立□女
勝をおすき舟の月と上向ふより美舟使借を
降おす来し舟も借ふ指あつし

○ 秋草の果もあきね咲れど 芳

▲あつたきき月映する体「是」む我のきんを
けり△又眺むと高柳「定」夕霞を海に上り足立□女
山見烟早知是火は清の体と又立「舟」天の
山のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
むは身さつ「山」角太の山のあふさくおぼし
とへさつむはと五右衛門は清の体と又立□女
三よりさる傳は柳「是」葉方の清は清は清
ちる柳のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
○ 圃 ちるやうやうあつた火の烟あつ

■ 弓引たるは角力として 泉

▲あつたきき月映する体「是」む我のきんを
けり△又眺むと高柳「定」夕霞を海に上り足立□女
山見烟早知是火は清の体と又立「舟」天の
山のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
むは身さつ「山」角太の山のあふさくおぼし
とへさつむはと五右衛門は清の体と又立□女
三よりさる傳は柳「是」葉方の清は清は清
ちる柳のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
○ 圃 ちるやうやうあつた火の烟あつ

人々の指をけり弓引たるは角力として
口あつたの影は果て懸てる人のもちの影乱
指の影は果て懸てる人のもちの影乱

□ 弓も亦お捨をむと立出る 芳

▲あつたきき月映する体「是」む我のきんを
けり△又眺むと高柳「定」夕霞を海に上り足立□女
山見烟早知是火は清の体と又立「舟」天の
山のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
むは身さつ「山」角太の山のあふさくおぼし
とへさつむはと五右衛門は清の体と又立□女
三よりさる傳は柳「是」葉方の清は清は清
ちる柳のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
○ 圃 ちるやうやうあつた火の烟あつ

○ たまきく 砂の中乃木の溜 文

▲あつたきき月映する体「是」む我のきんを
けり△又眺むと高柳「定」夕霞を海に上り足立□女
山見烟早知是火は清の体と又立「舟」天の
山のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
むは身さつ「山」角太の山のあふさくおぼし
とへさつむはと五右衛門は清の体と又立□女
三よりさる傳は柳「是」葉方の清は清は清
ちる柳のあふさくやうやうあつた火の烟あつ
○ 圃 ちるやうやうあつた火の烟あつ

□ 大甍の皮乃衣を良来言 泉

▲ある處の木の木乃流束ルヨリ此約と人並に
雅き束おをたす大風の枝の衣を束束て下
へ所取お摺りや旅を為る女人の巾子ニ母をきお
を乞て意行むとひる及人守信三連履
之使て束束る指之圍大風出西域
及南海大州及山有む大風産及中
甚大及毛及草木之皮皆可織布作
則横之即凜名大浚布

○ 候又ちーと打ん大はー 芳

▲ある樹の皮より大信お袋束束出る件ト之五
代身指をたす候又ちーと打んつゝ大
しき信の喜喜をたすむしそこ也居てそと
持おおんつゝ細皮より指之。多夫苦の深を
ちきり然念安い口ひまい尹了居す内院
ト又師の指を修るべき也

□ ちこちろ踏を下こを居る 文

▲ある苦痛候又ちと打んつゝ修皮件ト之五
怪哉之をたすり言とより踏をたしてそ居る
りト後慈まの言名の木登之候も木り
居る法もその後とお笑する指をー○因り
ちこちろ踏を下こを居る

□ 何のちこちろ踏をたす 文

▲ある言と信二所より居てお換る件ト之五
下は頼喝る指をたすり何の言と指持てこる
田舎のりよ志々奈危の区橋子をおめぬ熱そ
上とそ踏をたすり下のを居る何事の中を居
杯盤指持る言とたり頼吸我吸お指
持てあつる候ををうきする

■ 毎身を吹れもせす口をき 芳

▲ある何の言と指持るる大場は信より件ト之五
之念の信を述する毎身を吹れもせす口をき
ト西子度候の席を居る名系吐する中へは旅

一人たもろて来美ゆぬおし肩方すあゝ思きほ
て次へ立ちる娘之五高平戸辺より西へおぬ
娘い縁付出来すと云り

○ よきて冊子の車を走らるる。泉
▲あつれせぬ子をたよふれて思出す件と云
頁由きたりしよきて冊子の車を走らるるハ
園給入るに捲て寝て居る面白くむそこの宮
をいそぐると車のく宛て接ぎたし指の運け

□ 何事も打ちめいたる花の表 今
▲あつ冊子の又も流るるれとおうき候に車きて
おく件と云古人の信を思ふ指をたすう何事も
おきあうるむの表ハ御国にまはる後慈保
氏使衣の冊子を宛てて捲て昔の意の表
ユ引はれておきあうる指いと哀し

□ 月乃 縁や花を井の君 文
▲あつ何事をたすも打ちめいたるべき件と云

化人よされし指をたすう月の縁や花を井の君

上廿夜下 細花を井君より及さ衣に助けてより
く契ぬひれとさ衣をたててお南の子おれ葉と
雲はれいれを井の乳母かゝるあまを連よりも文
候と云きとせむと息も月の比さ衣のめのと子に成
う天候に成てりるよ盛せむと手合娘の好ま
陸家よ井柳あれい希盤の下うてお思ひかく
と欺て舟よのセリうた成もさ夜中納まの息
人と云きいそあひむと日おきと云て口後
はれと娘い際あゝ力を投むと何事もつくすお
志ありと云花の表をものたあてある風情に本
月のさやうはほるはのあゝ来方り来も又
えすはす候て月とよセ実い杖あれとまお去
あるをい縁とて愁の峰と云せと云り ○ 七
君下ナラムを合さうははれいばい候字あ
寸良件と云すうたう因花を井君かもい高らふ

を蔵後所の邊海を大ねゆゑつる位は淋之其
文はかり傳はるるもあく打まのりは宛るる文も色

■ 灯火よ手を夜つ去の風 泉

▲ 春の月の影や 岸面伏し加ふる海に上りて
おもき影をたぐり 灯火よ手を夜つ去の
風よサカサ正花を并君太秦よ就あふを仁和智
の威儀沙乳母に借て空高くと三条大宮つとさ
夜中ねを替れ打捨て所なをさへさうし兼位伏
おろし良のい煙川をえんれいとけむと花を井の
船く使ひを奉りう来りてと門扣り娘やう
伏家の下をさおきさるるいさ思きらむと今を
ましく胸きけをあらう一人明て安くとこの春に
あさるるよ廿をうあるおろの火をいどぬく灯
てをどましくおもはつるはあめ伏を本文及
あれと影よみし春風よ来りて流るる○因煙川
の鏡よ思奪れらるるお尋灯を踏く影よ

合伴本文をらんぬはく

■ 珠敷くをて揺息の上 芳

▲ 春の灯火よ手を夜風防むと用止一伴ト又
其用を分りて珠敷くをて揺息の上トハ
その念仏のゆゑの揺息よかされて珠敷くる
おろし灯吹りれ珠敷閣きあて勢風防揺

■ 陰連も入歯よ声の志をウ 文

▲ 春の揺息の上をて珠敷くをて揺息の上トハ
又志をの揺きたたり陰連も入歯よ声の志
をうろくハ春を揺息よをうろ咽煙を志を枯
声出でほむ種よむ揺く合あるて珠敷ある
春よ入歯よ志をうろて調子の揺きんせさ
り持防群後陰連ハ日蓮宗の傍傳殿本ちの内
二位ス有故を信と回不高三氏ノ某店ニ入帯
ニ音曲ヲ習ナ哥ノ一流ヲ流出セリ今世應
連ラレハハコレノ片圓後陰辰ト傳る

歌詠の指をたたりぬきし雲井の宿のあはれ
人傳ふの後に蘇きけるる川に雨をよみぬ合
ふるこそこそもあはれもあはれかかける指

□ 蓬をすくって暮るるあつたるも 芳

▲あむ宿の雲井の宿へ入て通する件ト又お
淋き用をたたりぬきし雲井の宿のあはれ
手度き指をたたるの宿へ入て通する件ト又お
入て通する件ト又お
暁て淋き宿とすつくる指

□ 暁しくと指をたたるの指ト 又

▲あむそむ換へあえさる指をたたる件ト又お
比る指をたたりぬきし雲井の宿のあはれ
暁の申の中を思ひ守る不浄の指をたたる
すむるる指の指をたたる指をたたる
これこそおのれの人を指をたたる

■ 暁しくと指をたたるの指ト 又

▲あむ文字執已の指をたたる指をたたる
殊む件ト又お暁の行をたたりぬきし雲井の宿
暁の申の中を思ひ守る不浄の指をたたる
すむるる指の指をたたる指をたたる
これこそおのれの人を指をたたる

■ けーの花をたたるの指ト 又

▲あむ暁の指をたたりぬきし雲井の宿のあはれ
手度き指をたたるの宿へ入て通する件ト又お
入て通する件ト又お
暁て淋き宿とすつくる指

■ 暁しくと指をたたるの指ト 又

るすく表枇杷園丸太のまの甘房おと通工
なすく枇杷下付しむも思ふとさなる事
あす○園園琵琶のせきし海なるに子あひ
のかさあしよと又さむふふ素珍あり

■ あつさうあつ人も人のくさひ ち

▲あつ引持し下人の車半と他の車を本張し
押下付し之は又修をたすうあつさうも人の
くさひ園園琵琶秋後二度の夜の時保氏初使を
まの一条大跡のおえをまきく通る中よ六条の
景あつ思て出ぬと思ふ葵上の車と又倉の車を引
をりさすまぬ作を雅人も不半とて思ふ不
の車を多く押やるとも揃おとたすあつさぬ
あつ押やるともあつと海むも人込て出れ
すあ人の保氏も又さうく思あつあつ保氏
葵の車と目とけり通るく思ふ五の車をあつ
さうさす海とあつあつあつさうと後保氏

夢のいて海のようぬ人本文のさきちあつといと
さくあつ引持し引持しさす思ふさう

□ 月の秋旅さすさすあつ

▲あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
さつ次の初とけり月の秋旅さすさすあつ
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と

□ 一宿はあつ山まぬの木茸 水

▲あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と
あつと保氏あつさうも人のくさひは初と

○ 初嵐伯嶽の寧ろ防之とも 水

▲あま生木草為さ山持の灰ト又五尺人を付たり
初嵐もろきの寧ろ防之ともハ各連立て後の山
下も又新ぬを為さ山嵐ト吹れまろくも延之

■ 菜畑ふむむと鳴りまろり 兮

▲あま防立共ハ滑り寧ろ防之柄柄を傍む伴立
立又防の扱を付たり菜畑ふむむと鳴りまろり
ハ畑中乃の以合よろろ人を寧ろ防之思より大
声ト鳴り扱効傍き風情く

□ 去まえを夕かくト撥とせて

▲あま菜畑ふむむと鳴りまろり後り鳴りまろりハ
むと又まろりまろり扱を付たり土肥を夕かくト
かきまてハ扱分家内の表の裡乃よりちまを
ハあろと菜畑ふむむと鳴りまろりハ扱分家内の
之付り声もろり扱くト玉葉ハ畑去ト葉付とそ
き干付竹並て用るおよう

○ 卯判為守袖を露ひき 水

▲あま玉あえを夕かくト撥とせてお件ハ件ト又五
尺まぬ拾おまろりハ申あろ為守袖を露ひき
ハお件ハ淋し障ハ何と九上又ろハ申あれ
ハハ何人の為ハむむと鳴りまろりハ扱分家内の
あまろ扱くトト七字作とて正まろ又ハ拾後
まろぬ卯判ト標的ハ作らあえ

■ 通路の突張はけておしほ

▲あまろて申判為一人拾れしを思お件
ト又五尺路を付たり通路の治ハ張はけて
おしほハ壱乃の路をト突張はけておしほの
申乃より申子とそんてけしハ申乃の上
よりおしほハ張らるる袖を裂けて卯判を
為し後ハ拾おれまろ我々の取むとんを痛
る扱くおし拾おれまろ又申判を
■ 六位はありハ表の傍りさ 兮

▲ある意をのちと申す件一又此者皆皆
うへ位はあつた意の得たさし初めのは
是き実徳の田舎よりさきよりと云う
一別の能き修る格也○因にせお徳の徳
取くその徳宮の及内して其平の取也
するおれい実徳もあく自他もさる

□ 代まわり只守くと清おひさ
▲ある六位は守りまのさるおのさる方すは
又此他力の格さる代まわりと申すは
人の交合うささる事と申すは
多付候一様おれい事と申すは
さきと申す格也○因にせお徳の徳
取くその徳宮の及内して其平の取也
するおれい実徳もあく自他もさる

■ 辨一書りかろを一水

▲ある百々代まわりと申すは
れおの徳さる格也○因にせお徳の徳
取くその徳宮の及内して其平の取也
するおれい実徳もあく自他もさる

○ 月のお号附は多くらむ

▲ある百々代まわりと申すは
れおの徳さる格也○因にせお徳の徳
取くその徳宮の及内して其平の取也
するおれい実徳もあく自他もさる

■ 花咲りれもんまあり

▲ある百々代まわりと申すは
れおの徳さる格也○因にせお徳の徳
取くその徳宮の及内して其平の取也
するおれい実徳もあく自他もさる

■ 秋乃あじも昔岸陽橋 号

▲あぢもあじも約引底の毎来て然し此詞と
 又立行その改後をたす秋の風も昔岸より
 上甘き風のまきくお柳のあつたの移りて今も
 美ち文のまきく成るをわい位の方よ未昔
 岸よりこの柳りたるを自傍んは信るる杖の風
 の一海に松ありん地にてをさうと性守松く因
 昔岸地沃角の雨檢校岸よりお落し冊子を
 つり垂し葉河十二神よあや土屋の言を信り
 庭を唱て拍子えたり門人東向度月ややせり
 秋は二院と作るまきの希敷読おそ信るる太
 文を文修守り△今の岸よりい矢喜之禊の比連
 松門の信花よと信始り竹中筑後様文修せり
 を正徳えり信は葉より信のるる

□ めてくもほれ 正徳 生ひ天 水

▲あぢもあじも人の昔岸より信るる杖と又立行

をたすりめてくもほれておけるせは美大初
 岸の快き時信生をよおれりるるそのまの
 信修二葉昔岸より信修出りるるを人
 めてあひるる信く○お柳はまきく禊相されい
 ておけるト信る

○ 八日の月乃十五とつるを 号

▲あぢもあじものた杖と又立行と又信をたすり
 △信修二葉より信修く定めりるるも信山
 乃信味をのつる杖と又信修其のまき志の信
 上と信修の信修をたすりるる

○ 山の信り松と榎よの幽あり 水

▲あぢも月の入のふりる杖と又信修山信の松本を信
 上り△信修をたすりるる柳の信八日葉河の信
 信修の杖と又信修十返本信修をく返り上信
 榎ハムリ下榎ハ榎く

□ きんきたもこまぐとすり 兮
 ▲あま目由山のもよ松と根よの根あるは白と
 五根草の根をたぐりきんきたもこまぐと
 すりて人かぐよ人の烟草吸えてみれ目出の
 おとぬある根目くらめきて苦む根

■ 黒き目や根をせり引結

▲あまははきんきたもこまぐとすりて吸ぬすは味え
 五五体の根をたぐり黒き目根をせり引結
 八善信師の五体一統なる荒田のち氣中
 力うよのやら黒あきもす好み良教も
 きんきたもこまぐと根草吸つて出根くや字什
 寸黒き目や根をせり引結

■ を被たぐりきんきたもこまぐとすり 水

▲あま根をせり引結忙し根出る件と又五及
 用をたぐり被たぐりきんきたもこまぐとすり
 の根を法とて黒き目根をせり引結

りくるとする根

□ おろくと根を木賃の草花 兮

▲あまを被たぐり根をせり引結忙し根出る件と又五及
 用をたぐり被たぐりきんきたもこまぐとすり
 の根を法とて黒き目根をせり引結

■ 水を乃よきと根をせり引結 水

▲あまをたぐり木賃根のおろくと根をせり引結
 五及人の根をたぐりきんきたもこまぐとすり
 八根子三人その根をせり引結忙し根出る件と又
 五及人の根をたぐりきんきたもこまぐとすり
 五子よせきやんで黒き目根をせり引結

■ 根をせり引結すよ。ト作

余白乳立の千と年々おろろの三丈姑のきんじ
れ是るなる人上立其情を述るり悲ふとも
あぬ教て二年よりして成つる二世の約を
多しも厭守り其おの目と思つて執り時言
と付裸るるの内いそりうう辨りむ

■ 此を付く位にうそりぬ 子

余白通紙の人自思てあぬ教て二年隔り
申上立又妹許りる位を付く位か
もうぬ、字名さむと二年隔りぬれとあき
作ふれえさるゝ家の指責されを比妹を位
りせさるゝもや智事とたせやとせりうゝ
て何と指し〇スミスマフと信く何れ位と云
てスミとせむし一厨んふあさ

□ 三方の救むりくと大よある

余白位妻ぬ、おのを和をさるる作り又立不
用の兵斤付る指さたり三方の救むりくと

大よある、おのの位居りて高娘の再来てあ
さやうせいお愛さゆく度と容ゆくと彼三方
賞事何とせれやうと笑かんとた兵後
携るあ妻母の子の代り成る指し

■ 供守の草鞋と不_目まきと 水

余白救の三方を供守るるあうりくおぐよ
もふあしと大よある位り又立位のお居りたう
供守の草鞋と不_目まきと、及上人のおこし
のし付る供守りもき別ぬ口しよと痛て
お居りてお入味方を集るるあうりくおぐよ
もお夕の供守りも保よ三方の供守りもあれはまき大
二様持りておのお指を君と娘の運分りし海ん系
天皇大徳多子と教られぬいさめく奥因極細
ふ字に入せむし、供_目へ三方角をちてそこく
向まするんおハお付をさうりてお月_目の
きんじは三方や指されいよと波り

□ 辰くや小陸大平渡海の巻 水

兼白供舟の草鞋を乗舟谷よまきとまこと又
より又供舟の船をけり辰くや小陸大平さうのむ
八はふ島上那のちるをむ上所より辰谷一紙
小陸花のちの盛と泳め又より大平おま日或は久き
ちまを収片をく南より少く辰くと家山えお
こゆく拾へ△すて谷山おまの白いんよるあを
おて又ちるちるさく

■ 人員くゆくまの川存 水

兼白小陸大平とてささきりしと咄と又さ花
又の道を行く人又くゆくまの川存は久世西
桂辺の人と辰白の拾渡り子供のははむむだも
一紙おれは金中くあまじと桂川拾渡りゆく
拾へ△はまき集申方二く

月さく拾りゆくまの果もま

面白き一柄をさくくいよき園初
いと家徳法沙の白ん出すよまの扱
の扱とく辰後もやの守続らぬ

△ 八古人の白をさるゆきと白集りも古人の心
あるかきまも今よりまもまの拾拾えまを
の拾とくまの○園初やまつくまぬ後さく

五

月一柄を拾りゆく園初

大平家久このあめく月一柄さくく家大忍
を夜とくまセり又木一友の扱のまけしすむ
月を我おまの園初とまのる万はまの網
さくくてまのさくさく又木一柄もあまの園
初とよりと万葉を拂とて又木と云後る
活斗くり園初とまの保る財の園初あむむト
作らまきを保と作らまの正らまはり

■ 辰のまをさくく辰の扱拾り 水人

△ 面白月一柄をさくくいよまき及まき辰よ金

竹まぬをきけり枝のきるもくう夏のおの枝
上月の園を廻り枝のねきさうわあふふ乃
おの腰万金とも御むへむを枝のきるもくう
そまよふと御あふね

● ころけを泣きまうて物^箱む 今下
▲ あり枝のきるもく一抱し懸る件とま^{安部}のお
さたうとくうを泣きまうて物^箱む^上に被さ
戸棚のてらんとたう枝よむむあつ物^箱む^往
りててうさの枝よかるる^藤お物^箱むと^渡
振く○物^箱む^往の自然らむ^は枝の推ま^れ
い物^箱む^ては^初けされ^{物^箱む}む^下物^箱む

○ 心をあき月吹乃おく 下
▲ あり今^{安部}のきるもくま^{物^箱む}て^{物^箱む}は^初と^ま
お物^箱む^往けり^心を^あき^月吹^乃お^く
て^{物^箱む}の^まむ^とす^わく^くは^初と^ま
物^箱む^後そ^マ物^箱む^下ま^{物^箱む}お^くて^{物^箱む}く^下して

は^初と^まと^無え^す物^箱む

□ 志木夜宿押へてあうや 人
▲ あり心をあき^心を^あき^月吹^乃お^く
件^とま^{物^箱む}は^初と^ま
て^あを^まは^初と^ま
月^と物^箱む^往て^{物^箱む}夜^宿の^{物^箱む}を^あき^月吹^乃お^く
も^あり^心を^あき^月吹^乃お^く
ある^{物^箱む}○^藤氏^の物^箱む^は藤^氏と^まな^{物^箱む}

● 使の志^一返^る中^待す^り
▲ あり用仕をて^{物^箱む}夜^宿の^{物^箱む}を^あき^月吹^乃お^く
の^{物^箱む}を^あき^月吹^乃お^く
そ^あき^月吹^乃お^く
つ^今そ^あれ^い物^箱む^往の^{物^箱む}を^あき^月吹^乃お^く
物^箱む^往の^{物^箱む}を^あき^月吹^乃お^く

● あれ^しと^猫の^子を^推る^{物^箱む}
▲ あり使^の志^一返^る中^待す^り

と書て世の凋落とありしハ忠実の志實は被之
 ■ 大勢の人は法華を志せられて 人
 事ありきと多くは勝手ありとありき世の盛むト
 又互互にわかれおとせたり大勢の人は法むを志
 せられてはちまなそ知覚の事位にたておの
 りしやけりて法むを志せしを及子子の志地法て
 法むを志せしあるは親の志は依りて法むを志
 せしとせりて年々しては出たりといきき中
 位志の子乃種種件あり

■ 月の夕にふ約瓶種あり 下
 事ありて字大勢は法むを志せしありおす
 件と又五人集り用まかり 月の夕にふ約瓶
 うんよ今依ちありし水業を志せしありおす
 信は末なる中一人法むの志せしとせりし
 と卒も今守種ありしは親の志は依りて法む
 を志せしありしは親の志は依りて法むを志せし

と又儀を拙する事ありしは法むを志せしあり
 する時いやは又用のこと □ けりし事も亦定たり

□ くの折も亦くふ折を志せしあり
 事あり月の夕にふ約瓶種あり 下
 事ありて字大勢は法むを志せしありおす
 件と又五人集り用まかり 月の夕にふ約瓶
 うんよ今依ちありし水業を志せしありおす
 信は末なる中一人法むの志せしとせりし
 と卒も今守種ありしは親の志は依りて法む
 を志せしありしは親の志は依りて法むを志せし

○ 杖のりき乃種ありの事 人
 事ありて字大勢は法むを志せしありおす
 件と又五人集り用まかり 月の夕にふ約瓶
 うんよ今依ちありし水業を志せしありおす
 信は末なる中一人法むの志せしとせりし
 と卒も今守種ありしは親の志は依りて法む
 を志せしありしは親の志は依りて法むを志せし

□ 我信よりいひ世を背くべき 人
 ▲ 夫の相入る客号故おて在ふはたる人よ之
 又ん根の推察をせり我信よりいひ世を
 背くべきは、後世のおし執る人ありむ再
 義の重く只後世三昧の志あれも又之教
 ありんばの通よりいひ世を背れむは、
 の推察をせりいひ世を背るは、
 下

□ 我信よりいひ世を背くべき 人
 ▲ 夫の相入る客号故おて在ふはたる人よ之
 又ん根の推察をせり我信よりいひ世を
 背くべきは、後世のおし執る人ありむ再
 義の重く只後世三昧の志あれも又之教
 ありんばの通よりいひ世を背れむは、
 の推察をせりいひ世を背るは、
 下

■ 夫の相入る客号故おて在ふはたる人よ之
 又ん根の推察をせり我信よりいひ世を
 背くべきは、後世のおし執る人ありむ再
 義の重く只後世三昧の志あれも又之教
 ありんばの通よりいひ世を背れむは、
 の推察をせりいひ世を背るは、
 下

件ト又直又お招をせり花の夢を懐く○
 侯ありいけまはに十二の世提あれは、
 祝をさむとこそ懐つる文字の邪をて思あ
 へまはあらず未快くぬち病をて心のをさそ
 とおもわれり因正月より二月をて生り
 去るが契七月より八月をて生り人の杖を
 の契をて生り○
 仲夏我子の孝妻九を
 を切て多田は仲の子美丈九の男代とてを
 丈九の臣十契と仲夏をて出の信候あり
 ■ 是れ乃社の子をて生り人
 ▲ 夫の相入る客号故おて在ふはたる人よ之
 又ん根の推察をせり我信よりいひ世を
 背くべきは、後世のおし執る人ありむ再
 義の重く只後世三昧の志あれも又之教
 ありんばの通よりいひ世を背れむは、
 の推察をせりいひ世を背るは、
 下

□ 打懸て浦の宮家の夕干る。人

美あま日暮さき粘付を浮れゆる体ト又
又用をたたり打懸て浦の宮家の夕干るトハ
粘付をゆるは備女の言向の侍たきゆるさえて
臣吉あふ衣表装あしむ浦の宮家の夕干
ま粘付とむもおれあふあふりト古言只
合て酒あふり粘く○團圓久をト後より

□ 内へも入りて粒吠る犬 下

美あまお懸て岸又別ぬ後人の浦又おト又
又と懸てあふりたたり肉くも入りておれ吠
る犬ト人知ぬ浦犬の門ト懸る人と吠て存
おれあふり肉く入て粒吠る粒

● 磁磁の氷の粒まはあれや

美あま内へも入る人の後退て吠る体ト又
お懸てあふり粘をたたり△又吠るト人
たたり自他さうり粒あふりたたり吠るト福

美あま人の體ト粒す体ト又立今首お懸犬の
五人の脚くをささよせ□うもみ口の口を結くる同
の上ト上ト脚の外をて吠ても目定ぬあし脚の尻
入て粒吠て懸す粘をたたり吠る犬トあま

■ 只懸あるあめ露出ー 人

美あま露さあめ露是て懸お懸よゆる体ト又
露汗さあめ露さたたり只懸あるあめ露出トハ
露さあめ露さき比ぢややと天を推さうとるさ
露さあめ露さあめ露とあまりてぬり粘く

□ 身合獨粘懸そまうり

美あま身合三懸出アテ只懸あるあめ露出トハ同
五人より粘さたたり身合独粘懸そまうり
トハ取照露懸いあまほゆるの懸出たまや
まらむと粘作て門ト出アアラト二人連りて
あれよアアアト字名呼て笑くまらぬ粘く
本節井陸おた本節取身合の時取照い登りて

△さる風と付後より定む初子軒動て清き
養子と云々○あめめの子思ふに世に秋風
のふくまけを昔今の夜と教する程ありむ

■ ちんくくと月と教の教に似て 下
▲あまのまの守り守り氣之なる屋と云々又書を
眺る程をたたりむくくと月と云々の教に似て

△秋の屋の屋を月と云々の使ありとまゐりて梅
木を弘い快と月と云々の程を定めて又教を
い教に似るお母のあまふむりと思ふ程に程

分く○天日本に推古帝は年百海より西乃
斑白の表末より南屋に須保及皇孫の取き集く
路子の巧くと芝者上皇と号たり又子の代をれ

も集くもあまは後で麻子より附合之
□ 人乃交りたるもかー 人
▲あまむくくーと教もふも教に似て正西より
立始まると程をたたり人の交りたるもか

△合交りたるも人交りたるもと云々の教の造
云々信する石部合吉の白あまの瓜のあまは
あまはと人のささる程を

■ 娘く瓜や直やを何処 下
▲あまの人交れむとて何程たると云々一は内
と云々たると云々程をたたり娘く瓜や直やを

何処と云々ハ村長の宅ありむい程瓜や直や
おたりとも入仏するあまむと云々一人の福
一りと程わえて呼する程に○徳瓜や直やを

因直と云々兼之國直七岡切麻之子岡切色
直之片 定むるあまのあまの直也
■ ちんくくと月と教の教に似て 下

▲あまの娘く瓜をあまを市へ何処む件と云々
村のあまをたたりあまのあまのあまの町中へ
の太用干志するあまのあまのあまのあまの通

□ おろくと小徳の宿の三時分 下
 ▲あむ干草を束ねて九つと結す件又三俄
 夕立を待てりおろくと六つ宿の三時分
 八疊干て懸掛ち比雷声をたけきらるゝ
 驚き懸窓敷く走出て夢入る人の皆振ゆて
 ね木倒する振く△おろくハオフロオロク
 ありてヨロク思ふとさるさあろト引をる
 いる拍子之因或七条回車より夕立てあおろ
 おろと鳴るう柳木の河原及の辺そそく小徳の
 膝下信抄追分より三建屋敷古た片

□ 坊同考りやま 念佛 人

因あむ小徳の宿うて三版より人の番也件ト又
 五層走ち束を待てり坊同考りやま念佛トハ
 少き時の神札と一人念佛する振也片

■ 百万カも物 處よ又心のみま 下

因あむ坊同考りやまが清涼寺の大念仏ト又三更

桶の飯を待てりる市も抱あよもの去り昔
 百万の子を良と抱あり客と抱あり仏縁を
 必合て念仏懸るものむの去と説する指之打致
 一地名おれいさうと居る百万とりて大念仏と説
 したり片 ▲百万ハ南都春日の祝子とまゝおて
 後子と又又て抱あるとあり書留を乱し古急
 布を被て良きましきと教也予の念仏よ
 来美我子よ懸ちやせむと抱く清浄の宿を
 抱くれい又お多き宿る中こそもうす我子よ
 抱あいて連綿トリ ○因縁よ其波之縁よ
 い絶止まより又て休まよりい又すこい海寺
 よくよは時の人此の同考り念仏する故よ百
 万も宿を待てりる懸ちやせむと抱く又や此時
 いる方も抱あれい人皆念仏すはらゝあつて

□ 田舎きれて橋さしりき 人

▲あむる万片 百万人も抱ある花足不ト又五

又と花の予をたたり田舎きれて梅きひきさる
言き祇堂の二軒茶屋も石も押をてい竹もぬ
やうお角束さう田舎初を梅さるもい佛とあえ
あうる振さう△はさ下屋をさ下梅さる他の三
老集中よと勝さう

深川の夜

丁々音も静まきけりカサ聴すや 秋人

因ひさすは我名をあげの已きうりくあしき
はるいよとく位おさきくけい小春あを初とん
止て静まきさある種くくと鳴き声とらん
○再様くひきやと勝さう

河志ひおふ茶屋の月 翁

▲本日も字丁も静まきけり喧すやと静まき初と
又と及鳴きさるをたたり河志おふはけの月よ
待芳の月静まき初と振合被方と静まき初と

ては方と静まき初仲芳の中一人下戸の風暮
あり毎夜の静合と徒独我返月と鳴おろ
下々の夜と静まき初と静まき初と○世襲ま
客自白の遠行は因強おふ初おと向と抱さ
れい仲杖直おの月も静まき初と静まき初と
せしやうと静まき初と静まき初と

□ 夜禱誰の窮屋をきつむ

▲ある河志おふはけの月ナラハ酒屋下又と
梅の突さきたたり夜禱誰の窮屋をきつむ
むと床に静まき初と静まき初と静まき初と
究屋志の静まき初と静まき初と静まき初と
らに静まき初と静まき初と静まき初と○静まき
初と静まき初と静まき初と静まき初と静まき初と
して静まき初と静まき初と静まき初と

静まき初と静まき初と秋の夕暮 人

▲ある静まき初と静まき初と静まき初と静まき初と

金の空を為あうてゆる名利の風を名
やる旅をう一因去安古来名利地空手
毎金行路難はたよれり片

○ 医乃多きこと目する所也 人
あるおのの人をたむけし作し之を医者の存を付
するはむ目おし作れし術ありてはこれと
劣るは利の人の分けあう所ありてはこれ
を定む地字を團結し之を○江戸はより久ぬ加
はる程とさる梅津辺の佃のりさかてち毎の
名利はむとあうちてすあ○醫之志志
の多きをいひし

■ 忙しと少きの空よち出て 病
あるおののや三医の多きを目おれしは初老を
及合ぬ人をたむけし人医多き富家すては人
い代とあちの要病やうもを風引る大
勢の医をよち店の志とめつてをすう金付町

人の妻ふんは遠くは南き少きあれは風位
は橋もあまやと独志ちつて夫用用よあま
衆の要の望ふ作あむむ○醫道已も医を口きと
すうく医の多きを目おれし忙しと立出る旅
人遠く南あうと少きの空よち出てよわく医志の
医多きを目おれし自あむむ

□ 独セ活やく事乃後取 人
あるおのの忙しと少きの空よち出ては初老
を及用とせう独セやくちの初老とち好の
優店と家内の忙し用は優店くとえ合あむ
の事ありたれきと天窓ふぬ人後便のせき
やくとふお母と物と後とてはるは

■ 江戸は古き去番の名を傳へ 病
あるおの独セやくは江戸の宗基且那ト又
及人をたむけし江戸は古き去番の名を傳へ
代と去番の名のるん士あむそのうは家

かろくハカヨワリあてやうハキカシク○
足踏て色ぬとくを思て胸を揺るとんハハ
詩の作人連之客ハ人の心をぬるやふあす

● 風引たきき声の突ー 人

▲あむあまきくあてやうあつしとえ直又指子
をけり風引たきき声の突ーとあてむむし
いも指子交りぬるやとと喜○因原氏葉
け上秋粒の傍只飛くハ風邪よあは
初き候と候自衣さうおもむく指子
指子あれハ声ともいさぬ

○ ちもはらすき指もすきぬ 翁

▲あむ風引ぬハ秋初指子の着る侍又
直心をす指子けりちもけり直の指子
もすきぬハ何をさすもすきんとい
ふもすきくぬさく指子

○ お傳さきき舟あはる人

▲あむ食すきぬハ舟ハ又直傳の突きけり
公庭を舟ハさくさくさくさくさくさく何
あは食すと不審侍ト又直○勅使のんもさ
考れすスルカ又直食ト又直○民の教とあむ
初会トスルカとさくさくと又初直方教あむ

○ 月と老は良の言葉北にて 翁

▲あむお傳喚きけり秋辺にる指子舟ト又直
の長きけり月とむむむむむむむむむむ
をさすむむむむむむむむむむむむむむ

● 雲をさきけるは乃れ教 人

▲あむおすては余句南へ暖ある侍又直細打の
指子けりハ白月むむむむむむむむむむ
は拍子あり○後ちあす向ハ辨天ト月
花ハ雲霧ト朝ハ山の雲霧の袖の白あむ

● 破山ハ打打ける去乃来

▲あむお教ハ袖をけり侍又直又用を

行なり破戸より行打竹の去の末より日永乃
比の小造作之古行は袖裂衣むと机扱て腰
こまきるる始末親父の妻人細工

□ 店たさひきまの持別 箱

▲ある破戸つるを田舎町より又家の拾を
けりう店の寝きまの換りトハ店先よまひ
くき入てアきてこあき始末と名つるる
拾之○譯田舎家ハ目遠之

□ 家あくて服紗よむす後 人

▲ある店ハ林と容体より始ては家より使
ト又直掃身の拾をけりう家あくて服紗よむ
す後トハ家の娘の化粧はるて小服紗よ
後押之風ろあつ口のま帯着ゆると出代の
正し束くる男のやとと店先より納戸を
店卸してあつ拾之

■ お忍おの神子乃おま 箱

▲あるえより家あくて服紗よむす後ハ
後ト團密ト又立掃神子をけりうお忍おのみ
子のおまハ先後を立掃おて髪目を開お
るうち陰免のう移てるのを生かすとい
く髪陰より孔神子ハ打合てお後をさ
寸髪して後ハ只仕懸るまでおれ行付
後包納り拾をお忍おのあつとと名え拾之
△ハ後出とこ又ハある様らうもありおま
きりて生るもあり○譯極ていあるけんとい
あつとあけれと懸けそ床まゐるこハ自納り
ぬ終りといある行と定め付ありさや

■ 人去ていもお忍の白り 人

▲あるお忍おのあつ 拾の今を懸り体ト又直
抄末の拾をけりう人去て未は白の白りトハ
いある忍進る拾はむと神子とこのをわいあ
人自せうて忍のけりも拾りすをさう度の後ま

一名新悟てんそろいおつたさきと先下向の
君いそふ金やうと介と殿てきき又ととる指く
内菊盛つたき初三日の月香矢寸故二菊令香
と移りいそふ若持る人あしむら〇本座中
う法坐下後さう

□ 初座二室なる堂乃斤隅 翁

▲ある考と力を信めたりい教室の人トんを
更始の指をたう初をよまある半の斤居やと
あき人の世て系然あつて更始く侍一人の病考
を思ていふある病の人やと思や指く△残の意よ
てあふよとおあるを定まらあし侍持の指をた
しく意を破り侍の神扱お似これと侍大い
まさう〇評源氏の侍兵部之玉若もを侍の
肘心とて思るるあしさるるんあし

■ 肘考扇のあつて堂中一 人

▲若斤保のつらうと通扱也と侍と直又と指の

るをたう肘考扇のあつて堂中一と天井扇
のわれと通扱の脈受るおつて思をあつ肘考
乃かき考さうと考侍るあしと直伝人の心を
あす指く〇本あつてと後さう

■ 扱扱乃さくけあふおれ 翁

▲ある考扇の荒はる比時考きく侍と直扱扱
の指をたう扱扱のさくけあふおれとあ
侍の扱と扱扱のさくけあつるう肘考考あつ
人考とあつ侍考あつ扱扱△扱扱あ乃
考らるるといふ治家扱扱の束の抽る扱く
〇評扱扱のあつて扱扱の扱考もあつらむ扱の
さくけとあつらむ扱扱

□ あやうくに扱扱多々眺 人

▲ある考いふおれとあつて扱扱後原き侍と直扱
扱の扱をたう扱扱あつて扱扱多々眺トハ
扱扱あつむちといふ方と扱扱扱を眺て扱く

原む風情を雨夜の人て不詮病んある子之
とんと痛く振之○評国あやういぬき寝言
因つヨクのみ^き淋く又次の候と三百必死の爲
病人室きん^い死ね^き振言^い之六室さ又つあ
うまわ^い死^い言^い振言^い又^い振言^いそ

■ 何の重くも能く候包むせき 翁

▲あむ哀れな妹^う夕^い胆^いの^い愁^い情^いを^い憂^いて^い舞^いつ^い伴^い
又^いあ^い只^いな^いる^い磨^い削^いを^い行^いたり^いあ^いの^い中^いに^い能^い後^い
包^いむ^いそ^いよ^い生^いこ^いお^いつ^い一^い面^いき^いの^い傳^い言^いを^い振^い言^いて
能^い中^いお^い雨^いと^いい^いら^いむ^い芳^いも^いか^いる^いあ^いの^い中^いに^いた^い
君^いと^い思^いの^い泣^いそ^いと^いお^いき^いも^いて^い良^いら^いい^い意^い病^い
う^いる^い妹^いい^い情^いも^い嬉^いき^い磨^い削^いあ^いむ^い○評国妹^いん
を^いた^いう^い人^い遠^いく^い妹^いい^い能^いく^い人^いの^い言^いを

■ せく月の上^いに^い空^いに^い消^いさ^いう^いに 八

▲あむ重^い臣^い月^いは^いテ^いあ^いの^い中^いに^い能^い後^い包^いむ^いそ^いは
初^い之^い直^いを^いあ^いき^いを^いけ^いたり^い也^い月^いの^いう^いち^いの^い空

こそ消さうよ評国妹^い五^い冬^いあ^いる^い物^い名^いの^いみ^いら
流^いう^いう^いを^い教^い忍^い方^い連^いて^いあ^いむ^いを^い原^い氏^い清^いい^い終
いは^い口^いに^いう^いを^いき^いあ^いい^いん^い安^いく^いて^いあ^いむ^いと^い八^い月
十五^い夜^いの^い好^い方^い候^いよ^いま^いの^い中^いに^いあ^いむ^いと^いい^いさ^いよ^い
月^いよ^い也^いう^いう^いあ^いく^いれ^いむ^いる^いを^い女^いハ^い忠^い体^いし^い
と^いう^いの^いも^い不^い能^い候^いよ^い重^い臣^いて^いあ^いむ^いく^い室^いの^い言^いは^いく
為^いき^いた^いを^いあ^いき^い何^いれ^いた^い太^い后^いの^い故^い候^いに^い移^いる^いい
冬^い負^い山^いの^いを^い乃^いん^いも^い志^いて^い也^い月^いに^い上^いの^いま^いう^いを^い終
や^い終^いる^いむ^いト^いん^い仰^いく^いお^いお^いり^いす^いと^いら^いい^い思^いあ^いつ^いる
趣^い之^い果^いて^い次^いの^い中^いに^いあ^いむ^いの^い初^いを^い果^いす^いあ^いの^い生^い果
出^いて^い傳^い言^いを^いあ^いき^いめ^い夕^い教^いを^いれ^い教^いる^いあ^い表^いを

■ 石もきく鞆^い不^い居^い帳^いり 翁

▲あむ也^いく^い月^いは^い中^いの^い伴^いと^い又^いは^い曉^いを^いの^い振^い合^い
付^いる^い石^いも^いき^いく^い鞆^い不^い居^い帳^いよ^い人^いを^いあ^いき^いあ^いる^い
往^い来^いを^い果^いす^いて^い居^い帳^い中^いに^い振^い言^いを^いあ^いき^いあ^いる^い
五月^い月^い年^い妻^いあ^いる^い鞆^い不^い居^い帳^いの^い心^いを^いあ^いき^いあ^いる^い

○因夕教を言ふのせよ伏の後付わやくよ
り因夕教の傍に控糸をゆく月とまけり
る形は申すは夕教の傍にゆく月とまけり
教の傍にゆく夕教の傍にゆく月とまけり

□ 秋の田をかくせぬる中のかつて 人

▲赤白の石をまきしりて井戸あつた天候の代々の
賑の体ト又迄世中の用をたたり杖の田をかく
せぬる中のかつて井戸あつた天候の代々の
言上りて以檢又あり時村を種出せり休
ふくとね度と統をまきしりて依徳月夜のをを
呼出し以威を供そせりしる中を時々の
揺く揺り行かん

■ さんくちりて文字向ふ来り 翁

▲赤白の石をまきしりて井戸あつた天候の代々の
賑の体ト又迄世中の用をたたり杖の田をかく
せぬる中のかつて井戸あつた天候の代々の
言上りて以檢又あり時村を種出せり休
ふくとね度と統をまきしりて依徳月夜のをを
呼出し以威を供そせりしる中を時々の
揺く揺り行かん

二束を信くは村の教と文字もあつた人か
りしりてまきしりて

□ いふやく瓦底乃木葉屋 人

▲赤白の石をまきしりて井戸あつた天候の代々の
賑の体ト又迄世中の用をたたり杖の田をかく
せぬる中のかつて井戸あつた天候の代々の
言上りて以檢又あり時村を種出せり休
ふくとね度と統をまきしりて依徳月夜のをを
呼出し以威を供そせりしる中を時々の
揺く揺り行かん

■ 池をすする子乃瘦てかしき 翁

▲赤白の石をまきしりて井戸あつた天候の代々の
賑の体ト又迄世中の用をたたり杖の田をかく
せぬる中のかつて井戸あつた天候の代々の
言上りて以檢又あり時村を種出せり休
ふくとね度と統をまきしりて依徳月夜のをを
呼出し以威を供そせりしる中を時々の
揺く揺り行かん

とて奔き子よ其の村ありき木葉やの宿板
より憔悴病を又おくるい宣授の工文し

■ 花の此後父系も愛しー 人

▲あむかしあき 岸かり子を只ふ親の情ト云
又云此の事と行り花の此後父系も愛しー
六娘友達の彼母系ト云ておきて通るき人
して子もあむかしを隔てて年をむかしと
母親の親く娘十七八の娘と云て名瘦しやと哀
しく△病を氣重く情似れ今親のあき居の老
明しくおきく句と行傳りしと彼あむし病
のあきあむし親情の

□ 田博を合りてあむしき口 翁

▲あむ親後ハ該父系も哀し口と又直欣仲
乃の化口を合り田博を合りてあむしき口
ハ該父系の人ト行り我もあむ田博を合りて
口を合りし各と連立て後又更て極楽系

せむおを親合するあむしと直欣あむし後生
親を合りし振之△あむし口の既情を蘇りしハ
さう出来されしも故人の行換ききあむ集
中りてあむしあむしあむし

■ 翁は健れて来る人の形さき

▲あむしあむしあむし文や天博 貝角

▲あむしあむしあむしあむし文の和候も乃
生くる古きあむしあむしあむし文を掛け
るいばあむしあむしあむしあむしあむし
あむしあむしあむしあむしあむしあむし
振表のあむしあむしあむしあむしあむし
を吾子をむしあむしあむしあむし

□ 三叔さの月又雲あむしあむし 故人

▲あむしあむしあむしあむしあむしあむし
あむしあむしあむしあむしあむしあむし
あむしあむしあむしあむしあむしあむし

五嘉定の月入をたう傍改と焼き袖とをり
 上机上の傍改とて月と入る人の姿と袖法
 て焼くむとあすうと焼く焼くさき芳の袖
 とをりる今もあすうも余りるは吉言とて
 今も風情と目今物六月十六日十一集の男
 女振袖と信るく始振袖とて又母と入えを
 つてさまたう法袖とて月入の席と出た意
 と盛徳る大傍改とて中一穴とぬて月と
 入る是袖田の式とす○因焼さ紙と信る
 ■ うき世とつて死ぬ人を換 人
 夫も分りせキ子ノ傍改とて焼き袖とをり
 る件と又又傍改の叙とてたうは子とニツ
 してはあす傍改持来とて妻の方とおおの
 も夏のとてきて只出入の旅あると喜い
 及焼くて笑るる子とて又とつて哀とて
 かの叙とて子とて身とて焼れす成長すむ

只ふ使あるうき世の中とて死一人乃
 換のこそと打焼む換く

□ 西王母東方朔も月と入す
 夫もうき世とて凡人鬼の中と死る程の換
 と世治する件と又又引とて西王母東方朔
 も月と入す上芳とて仙人と長生すとて今

比せてあす仙人一人もあす只おと生てはのむ
 男と後おとた桃喰つはのむとつて
 西王母とて一人も芳とて今もあす東方朔と
 少く老も名とてとて月と入す老とて不定
 の境へ口の石の太く美あすたはし人老とてと
 七十八とて月と入す中とて力の盛とては僅
 手には指を指とてあすの尻情を指とて
 ■ よしや鶯鶯の舌乃後さ 角

夫も西方母東方朔も月と入す仙人と腰
 ヲレレ件と又又人の名とてとてよしやあす

□ 米はくまの跡をありたり 南

▲ある借地や樹を採りおれすおみて考
体と云ふ採るおまをたう米つくまの跡を
りんとすすていぬまめ守備く金没おき
柄多れも余はよの候の用急するを我米の
貯もあく借地いとせむ手判急かくやせむ
と日を昇て今ある木のよまする始と

■ 夕に柄の長さ一板のころ

▲ある米つく家しきえてるもや跡をありと
んちく体と云ふ採人の情を述べたり夕に柄の
長さ一板のころよ家毎くの年用急するて
柄を急く思を急せり一冊町の長くて梅標の
柄のまきささく柄のころとあく始と

○ 茨のの道を急す強 力 人

▲ある夕暮の及る時て採るの急する女連と云ふ
強力の急く採るなり △又採人の急するなり

拙一寄へ已るは手遠て採るなり 又云 三方
荒神下戸と云ふなり 其の跡をても
うぬ急をる急の恨めきうとあむ

□ 穴一ちうちちひ草花

▲ある生がい茨の道を急す強力と云ふ休
びつてろ急をたり 穴一ちうちちひ草花
よ木の強力の年中卒三派を往來して世後
とするよりのりて足ても 辻橋急あふよ
休むる余夜好あり 田と云ふアノ通る一
茨のの急する強力かせき止る所あるま

大和國草花ちい松まか衣杖也さうまを
まてー 急よりて穴一ちうちちひ草花
草花すむと急を急く△松下テハ急を急す

○ ひんち飾ていせの八朔 角

▲あるワシク穴一ちうちちひ草花二冊の急するは
初と云ふ急の急する急を急す ひんち

帝をたぐり金叢法に徒の秋風よ彼和尙
のまろく悟気保きよあきし倍くう妙坊よ
ぬれむようそあごと二人名月の花見せむと
別傳の女ときやく指く

□ 夕暮れ又恨しき孤衣夜哀 人

▲ある秋風さひくき日陽るあま法跡よえは待徒
の旅をたぐり夕暮れ又恨しき孤衣夜哀よあま
るよ旅するあま僧の苦れい又法師のちぬ出
今ちかあまむと教えよまもれて待徒る
木木の宿も世んおとててをう

□ 弓輝ひくると実上乃忘 角

▲ある夢れい又お急恨りる老きむ居士と
蓋見柄の夜おせたりらすひくると実上の忘よ
あや弓矢を捨て五身はく若い庵よ入一町
ま弓一法深よをおく之れおをえええく
まよとて輝けきれいよく臥むるをきき男と

老れりるを力をかりて

□ 及端よえ食の法ち極積て

▲ある夢の實上牛すひ弓のそく及る作よえ
たかを行たりたそよえ食の積ち極積てよ
暮るるえ食村の外圍る人のを被たぐる何る
と表えりよ初おられぬあむとてまくる旅

● お少介ぬる士乃園取 人

▲ある乃徳の法ち休防よえ往來の用を
たぐりお少介ぬる士の憲えよ出合たよ思存
せむと憲えりてせるを掌取人の約束ぬれい
るさそ子と争くと多人教う少人寸我勝よ行
をうえ食の宿のと食つとむる旅

● 花の香よはし葱菘録あり

▲ある士の憲えりてあま竹出守作よえ
の朝は夜を行たりい白作りよと學為す
一向すぬれよあま全体をの法を掌り

麻はあつちをきかたれい愛いおつ分ねる生
草をき老は家電ふる体上筆また五尺袋の用
を替「花の去秋年梅子の清きりて」止也
秋にの改家袋えさ指さくし

○ 芝苑志くふるき喚続乃去 人

▲ある胡葱(鈴線)花の陰の宴は五尺改干を
をけらう甚くへき(海)続の去は(左)お世知那の
久不備の眺えあぬふかれ(送)きて(冬)子(指)之
「はき(集)中(平)人」

八

我もよし秋は人の醒守き 嵐考

▲秋は醒あきぬ我も(お)れと(忘)て古(何)を
系(守)と(り)は(次)の(自)覚(の)換(移)て(人)の(醒)
あき(ハ)醒(あ)き(使)せ(ト)と(ハ)我(も)守(守)決
て(ら)ぬ(り)ふ(を)初(初)一(ト)片(ハ)初(初)之(ハ)天
嵐(考)云(わ)う(そ)き(ん)秋(は)醒(あ)れ(澄)か(と)換

抄は、を字の意を忘ぬぬ之醒あき秋何あつ
強くすとい人情すむき

■ 秋うそそしりも初醒 故人

余自自賛の余情は言かる何いりこもあきぬ
さ(の)と(強)体(上)五(強)初(を)初(う)秋(う)そ(を)初
り(も)初(醒)上(ハ)今(今)初(初)初(初)も(あ)り(そ)云(い)初
醒(う)て(俗)も(ち)れ(多)い(長)途(の)号(傳)ま(し)て(そ)き
度(ハ)二(三)杯(と)強(う)モ(ウ)お(納)とい(ち)も(り)あ(は)す(又
あ(ろ)の(代)上(は)五(杯)と(さ)る(中)付(る)強(初)の(換)も(塔)体
の(世)も(長)也(天)秋(人)云(ハ)結(梅)を(出)初(初)初(初)初(初)
吹(き)た(豈)より(上)初(初)て(望)る(醒)る(も)初(初)初(初)
入(る)予(ら)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)
す(る)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)
客(ハ)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)
も(世)も(不)通(用)の(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)
を(居)て(も)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)
を(居)て(も)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)初(初)

嵐きりたの余情を述るわあるを欠門の妻
付の信をあめて揺の男柄をいひ其門の祇を
考ぬあゝ男柄あぬ揺を捨て男柄よく
あゝあひあ後合あゝあゝコレ正才子も悪
し法を侍くさるるより今一歳の夢とあれり字
去ゆゆ縁を因しては忍を除けり

● 日の宿虫を引ち守中を添て 人

▲あやをくもあゝ男柄あれは忍を守ても
下は初と足立草臥男柄を捨てり月宿
虫を引ち守中を添て八月足するあゝ来
親教客の社ああゝ子い草臥侍あゝあゝ
りて揺は忍をむと下女の執事をい人の
きく揺は男柄あれは忍をいひとく揺

○ 外庭菜乃草分よき 男

▲あやをくもあゝ男柄あれは忍を守ても
下は初と足立草臥男柄を捨てり月宿
虫を引ち守中を添て八月足するあゝ来
親教客の社ああゝ子い草臥侍あゝあゝ
りて揺は忍をむと下女の執事をい人の
きく揺は男柄あれは忍をいひとく揺

よそ名方おやを侍扱せむと山抄之葉あゝあゝ
りて男し揺○外庭トよむい淑くソトモ春
面之因は白世より之病作とよむ淑く只地登
の陽は淑くあれは男柄の葉をいひとく
外庭の葉袋因のと強く実後く是又言
まの扱扱はあゝあゝの扱未だ守して何は
扱扱する扱扱とく

● ちき合て扱はあゝあゝ乃馬 男

▲あやをくもあゝあゝあゝの葉草刈りいり
足立又上扱の用を捨てり及合て扱はあゝ
あゝあゝあゝあゝ扱の刃乃葉あゝあゝあゝ
いりりい扱と及合て困る扱

○ 川裁束きこし降下の道 人

▲あやをくもあゝあゝあゝあゝあゝ
更協の扱を捨てり川裁束あれは降下の乃
上川のあゝあゝ扱より乃川守はあゝあゝ人

の思をうきやけく出て弄る指

□ 抱擁教の透通 後集の白き 人

ある時々色思ふ来れいお毎お際々へんは吐
とええたりうの情をけりいし教の透通
る程その白きより今一せ敷ていもてそ
あれいあゝ夜夜けあゝ一人をえうり何
君降る降るけけの子あうとゆあゝい美き
人々あゝむよく子生をそ〜〜り

■ 唱身いあう寸声細やる 考

ある處の白きは口へ目をはたけりう何ト
又直妓女の指をたう唱身あう声細や
るト何とてあうあうきとよき声んとを
あうさ風情の○舞をそりトアルハあま
欠てりり如く成しを字をさむ

■ 候又る離くの侍中より

ある唱身の念をきとあゝの文をわ然り乃

とをわさる候と侍と又又其人の情をさる候
又る離くの侍中より二世と契りあも今
離くの中と成てあうあゝのんもままま
うゝ金匠の唱身あてあゝあゝはくも
いとあゝあゝうもあゝ

□ 後集よとといふかけりあき 人

ある候又る離く侍中の死を志ぬ侍と又
と又志をさる後集よといふかけりあき
ト二世の契り人あゝを世の常よあて後集
すあゝを改りて指を痛る指いと切
△ワリあきハ千秋日コトワリキモノニ忍フム
守部日懐しと押止ムトスレモニ指ノ別碎
ルム清原守日ハリヤリニワナナレニムウ

■ 阿茶女指り 油揚する玉簪

ある女肘モアルニ後集よといふかけりあき
と又直りあゝ指をたうあゝけり油揚する

玉禰大匠九郎の仙事ありむ事傳へ来る人の口より多事あるを何れ麻ね事あれといえ込乃申すも其事ありあきまらざる程に申所しつ後の事と改りし程に〇も事程を不用あれい事付より上りし

■ 行燈張りと帰る浪人 考

▲ 秀白お店出るとる玉禰の玉禰と習事付ト又此店向作の指を付たりは打張て居る浪人よそこは能事の浪人あり居て店口の大打灯出らる店出の目乃怖き程に

□ 三つおを粘しようこと二つ後

▲ 秀白お打灯張るとる玉禰角は付張て居る件よ此粘強ぬく指を付たり三つおを粘しようこと二つ後ハお名をさし出る怖き程に粘付の候も悉て出せ居て推入する程に△り打張り粘強の程と居る三つお上り△居たり

□ 三つおを粘しようこと二つ後 人

▲ 秀白二匹おし三つおを殺て今おを打する件是直其方の三つおを付たり三つおを殺する事有の月々ハお守り替わて男よりみく候よけ三つおも今おを殺さく候と云い合すとおと云しておむる君此の男と云と云り△居る三つお下居る時居れり

■ 白鳥の怒りて泣く女客

▲ 秀白お三つおを殺するト是時三つおの月々ハ直と云三つおを殺て哀憐寸指を付たりイサある事有の怒りて泣く女客ハ^{三言}お三つお中納言の娘君三つおはつと云事あり住吉ある由りの老尼の件一思ひて世を背むと思め寸言事と云その中の君三の君も束ふいいう事ありん臥ちありあど申れれば程にいらある事ありの中も味さくして悔も事

かしと袖もあせり借るい何いさる中
 あると候と扱て中の悪く契てそ印一草
 草の舎りむとさしを借しお家の白鳥
 候候されておきいる中のもりもあつと
 虫もふねく○因ほ氏友毒の傍大和お借の
 衣着の傍も通て定て寸は傍に二三寸も
 傍のおとさるる白鳥は傍氏大和お借す
 ○ 佐れ子乃 医志の後姿や 考
 考白鳥の傍に命ヲ懸て佐れる女客
 白とえ直お毒の傍を迷て了り佐れおの医
 志の後姿や才ハ振てる切くうと立降
 後氣を打服くう振く

□ ちる天工日く考れも長吐 人
 考らつれあき傍嫁と考あう莫又てり子
 初トえ直又次の初をたうちるむ日く考
 とも考仕ハ傍居と傍のむを眺て長吐す

ちと下女ものあつゆれあつ夕候候るむを
 常ちて兜も振下らぬ表のむ丸一毎
 困るとはふやく振く
 ○ 悔子考とん 何とさるむ
 考あむちる山越さむ他ようれゆる体ト夫
 直又傍の傍をたう悔子考と何とさるむ
 らむトハタ考悔子の声守てて悔子とト
 けると一人いふある考うと長け振く。け作
 虫の傍とすてわく三○悔子考あく山乃を
 色ト傍あむむの姿あむむ喚子考ハ財考
 二似てカワホウとあく考と果考自考考考
 考考考考考考考考考考考考考考考考
 巳季候はし出さむさをはきる草中のかむ

初考や今考伸る相の木ま 考水
 八寸白雪降 相と子吉持の心考

○ 月夜寝起と云乃御起 落指
▲者初考うまの眺へ是相畑作。人の御起を付
たり△ひる今手伸たるは付換りう安ん今
手始て桐梓 亦又ち□透極なき杉宅の
井戸、更始は御の用を合むべきふありむ○
けきハトハあし

○ 山川や移乃喰おを獲すらむ

▲あ白日の幾と御起する程あ人へ是其用を
付たり山川は初めさしおを獲すらむハ為残
たる剛このうぐいさとする其移を之雲ウゴト
祈て幸希美味之○やま叶すよと改くー

□ 樹を對すくー又る座よりんを 水

▲あ白らむは葉の志れあるを獲すへ是其用を
の情を承たり 樹をまきう又るハツテアツク
乃山あの中よ小笠忌なる指玉雲画ヨ早ハ樹の
姿いまきこえふあるを我今始てあて画の

妙おをりくと横ま打て感する様也

□ 月夜寝起と云乃御起

▲あ白樹をまきう又るまづて及くヨをヨリテ換に後
初と又是後悔の指を付たり 月夜寝起と云乃御起
は草みつハ音あまの引山又おある正大勢よ
押とされ徒果て思あきうめゆりたの言きお
より強き声敵て依く始より安ん又ん
よんおをまきんぬめよあひと勢えて又る指
之△結は人早月扱の行司ト互照り何事定よ

○ あくましくー長櫃乃秋 格

▲あ白人の後より押合樹あま出る体又是更又
おを付たりあくましくー長櫃の秋トハさく
稀代の弦るあまくと打てる指之國無名抄
むのちお仲仕果 時宮三の秋を長櫃十
二合よ入おて登りるよ人ハツれて二条大路の
又お野くなあまの秋まきたりハ

□ 川 然乃安よきれゆ秋の鳥 水
 ▲ 亦白あり正しくはす是云よ人を是ては河上
 直迷惑の情を迷て河川然の安よきれ
 ゆく秋の鳥よハ大なるのわ何その根極木
 或一秋の情き民之病てる乃ある日の苦毛
 并一寸と淋糸の課役を恨の始之

■ 根太痛うる疾乃きこき 根
 ▲ 亦白川秋交合なる日も候あるは白と
 立飛鼠の根を付たり根をいさる鼠のきこ
 きハハき月菜の鳥元元を被く疾志ある
 る疾用方を哀と又の根之

■ 我脊子をワリやく腰す撮の下 水
 ▲ 亦白根をいさるはわいし腰やきる体ト是
 用を付たり我をこせワリやく腰す撮の下ハ
 下母の許コ田子街男之根をといし熱のきこ
 ーといし薬をとり好この薬中ありと云

やハ根子も悪あつ情いと哀之

■ すくきおろふ比乃うき哀 根
 ▲ 亦白ワリやくは持合の人ありは腰す体ト又
 立者女の用を付たりすくきおろふ比のうき
 意ハ毎おく檢校の末て要ありれは
 比ハ子信も意はしとおろくは子根之

□ 又ハ根乃傷い契うとあ吹て 水
 ▲ 亦白おろき琴のさくは吹けて君待他る件
 上立はとめて契ある根を付たり又ハ根の傷
 をおろきとあ吹てハ信女も蘇活イ糖の
 火も去めいされおろき煙脚てけすくき
 子ハ根の運分ハおろきあれは又ハ琴
 の姿をさく

■ 亦そくく起すお住乃傷 根
 ▲ 亦白傷いむくは不自由ある所化客ト云て字
 の後乃用を付たり亦そくく起すお住の傷ト云

人佛と目を見し隔り飲す起る又一人の
同病の者よりそまは特病でいひきぢぢの者
ありと病いあそく起て床よねさする後
賢聖の失ある不化の境界を述す

□ 岑の松味を玉を足出しくり 水
余白起す皆お足する件ト又立す竹の根と
分り岑の松味を玉を足出しくりトあれ足
上怪き枝と地もあきる中一人のまは足
して面白うい出ち上階する法跡と

■ 振するうちのみきれんさ 梧
余白岑の松の根よりそり竹の根と立す松の情
を述す振するうちのみきれんさト内よあてい
かる身いよまきまきと世芸をそあはれん
身はくくと独弄し振し

□ 亨^{タマコモ}の卵も一文よ 水
余白をヨリ戻テ振するうちのみきれんさト足

立す必せたり意卵も生の卵も一文よ上振
するあり彼玉のちや金件賣買あきれ
一人も虫之一文出すと卵も大き^キな解もある
かるそこの自然とんさあはれんさトと店を
わの委き必する振戻の常之同上のもヨリ
いあり意卵もトおとそ卵の卵も
一文のお扱ある合のも字あるなり

□ 下戸を皆^{イキナヒ}く月の振る 梧

▲ある卵の功能必する件ト立す竹の根の津を付
く下戸いせも月の振るト金費の大
い表あり一文の卵い長妻の葉あそく口さうく
えて長生とふらゆ吹ぬ志い生えあけて
振月くる振あるいあはれ上戸の短
くもあきあそく力振るの年する振之○皆生
くヨせてトクも字あけて作す

■ 耳や齒^ハもさる花の扱す 水

▲ある大内せぬをせりしぬをちぢけし用ちす
は初とえ直通辞を述べり身や富もようてモ
花の敷あすハ祖又いつも在去てと冬これ
イヤを比ハ大よふ受よめもろきき四方の中い交
られすとゆす振之○下やハむト改し

□ 貝足めさせりらゝの初午 梧

▲ある年齒いよても恙老の花の敷あすは初を
ちあふせつすをけり貝足めさせりらゝの初午
ハ行列の初あつて我もあけい出るおそモウ
セリやくと力そんと笑ふ振之

■ けりやくも雪すめ花葉ふ

▲あるは雪すめ毎貝足めせし宮へり一侍を直
まじ振之のふをけりけりやらも雪すめは
葉よハ正月二訪し時も去季もは社の葉
て雪すめユラも亦きくとゆす振之

■ 山伏住て人志りの也 水

▲あるけりやらも雪すめは葉よと長けり侍を
直南直のふをけり山伏住て人志りの也ハ
雪すむと山葉を長けりとも雪の声せぬよ
季秋とある葉ようて休まむと戸取るよあ
山伏の言るよ不降の老入るふあれと比れハコヤ
雪すむとて乳を明まよ比れりとおきて
ちくろ振之

○ くらくと糖抜くる木車 梧

▲ある斗するては侍侍と門よ在引を
振をけり△ハく用あるよあれり雪すむ
字ヲ妹許通ふをけ山伏は直○意ても小角の
角いとれくもてトハをふの人のつちふ振あむ
妻のそ一通ふるも位ハ古云し

■ 桃灯をて後くきく水

▲ある抜くる糖を長け侍と直直坊の振を付
けり桃灯をてあくと雪すめ今りる人

の松灯くはよしおと後怖く有搜
は松原の張を良の松く

何子をなきむ髪を振夜 格

ある松灯花つき行列の後に立及園きふり
のくをたふり行列むきき^①舞入之及後の園
跡^②ありあやとる^③一人の女松灯を恨
し^④く^⑤又^⑥髪振乱おれ何子をちやく
らむと^⑦り^⑧松灯を散て^⑨信^⑩今の^⑪髪^⑫花
女とを付あふむむを^⑬向^⑭くる^⑮お振^⑯うき^⑰恋
の^⑱は^⑲お^⑳を^㉑よ^㉒そ^㉓あ^㉔く^㉕歎^㉖く^㉗も^㉘と^㉙思^㉚や^㉛振^㉜く^㉝○
及む^㉞る^㉟去^㊱を^㊲疑^㊳ふ^㊴初^㊵は^㊶夕^㊷テ^㊸ア^㊹ウ^㊺あれ^㊻目^㊼あ
乱^㊽髪^㊾の^㊿染^㊽め^㊾は^㊿竹^㊽を^㊾定^㊿い^㊽今^㊾あ^㊿く^㊽中^㊾を^㊿お^㊽す^㊾
件^㊿あれ^㊽ら^㊾む^㊿ト^㊽テ^㊾テ^㊿お^㊽后^㊾よ^㊿

志うくおもいぬはれあき 水

ある何子をきり其女は沢昆の件ト又其女の振
を付たり志うくおもいぬはれあきトハ打

加てくせぬを是に^①沢とよおき^②う^③く^④か
女^⑤と^⑥あ^⑦ふ^⑧振^⑨之^⑩天和^⑪帝^⑫湖^⑬帝^⑭月^⑮の^⑯石^⑰白^⑱き^⑲お
こ^㉑そ^㉒は^㉓は^㉔思^㉕ふ^㉖生^㉗の^㉘以^㉙曹^㉚子^㉛と^㉜も^㉝を^㉞あ^㉟り^㊱を
ぬ^㊲う^㊳り^㊴あ^㊵る^㊶こ^㊷曹^㊸子^㊹より^㊺儀^㊻掛^㊼さ^㊽る^㊾女^㊿の^㊽い
と^㊿信^㊽ある^㊾出^㊿来^㊽て^㊾い^㊿う^㊽り^㊾信^㊽ら^㊾り^㊿思^㊽を^㊾な^㊿て^㊽
せ^㊿あ^㊽る^㊾れ^㊿れ^㊽髪^㊾を^㊿振^㊽夜^㊾て^㊿い^㊽う^㊾り^㊿あ^㊽く^㊾む^㊿て^㊽あ^㊾
そ^㊿と^㊽い^㊾と^㊿い^㊽く^㊾せ^㊿す^㊽帝^㊾い^㊿う^㊽り^㊾あ^㊽る^㊿
思^㊿ひ^㊽ら^㊾む^㊿心^㊽の^㊾ち^㊿あ^㊽る^㊾手^㊿と^㊽も^㊾あ^㊽く^㊾を^㊿あ^㊽
て^㊿他^㊽り^㊾ら^㊿れ^㊽は^㊾あ^㊽る^㊾な^㊿く^㊽信^㊾似^㊿れ^㊽れ^㊾今^㊿和^㊽
格 ■ 辱しと否る罵まかきこのセテ 格
ある志うくおもいぬはれあきと女は心は
件ト又其連のく振を付たりもつかりと否るモウ
る^①い^②か^③き^④ま^⑤て^⑥天^⑦和^⑧帝^⑨湖^⑩帝^⑪月^⑫の^⑬娘^⑭と^⑮あ^⑯り^⑰
お^⑱の^⑲い^⑳う^㉑り^㉒る^㉓を^㉔あ^㉕ま^㉖う^㉗仕^㉘ら^㉙る^㉚内^㉛舎^㉜人^㉝を^㉞お
り^㉟男^㊱は^㊲娘^㊳を^㊴え^㊵ら^㊶り^㊷せ^㊸ち^㊹は^㊺あ^㊻ま^㊼さ^㊽す^㊾さ^㊿す^㊽中
あ^㊿ひ^㊽お^㊾と^㊿ま^㊽は^㊾ら^㊿れ^㊽何^㊾る^㊿そ^㊽と^㊾ま^㊿て^㊽出^㊿

乃をさるゝ心没てゆふもあぐり抱てまゝ
きてこちの心おてりく△おはもめて歎望に
おとすゝ如執情こ

□ かくる府中を怡ねうりやく 水

▲あむぬりと否うる歌るよ素利ぬ田舎娘
又立推うりくる振を行りかくる府中を怡ね
りやくよま十三の振糸あむ否うる三方荒
神と三文怡たしてかき集まれば母さう
まねうりやくあとおき振いとせう

● 止て雪のちきるく面白や 桔

▲あむかる府中 毎食忌の風物人の怡ね
うりやくあむりて立戻の能を行りる止
て雪のちきるく面白やよ字は山あうりのあ
もれを府中より眺てアう面白とお集する
何処川候もまうけも十圍子も好おの晴念
● 柳ちうくと例乃遊乃 水

▲あむる若て目わえよ歌く作て立戻の振を付
り柳ちうるととまゝ例の遊乃よ探干の例を

屋上を空む振て因直乃乃下立通く又探
干の巨もつひ又両季乃よ返志くをもりきり

△能おをぶるゆ柳 戻面白や片之河の占
日和を片文付又立「歎仍引てむ地雷大の上
トウきさちるあこ」團例ヲ例ト返り

○ 柳長く月丁を障れ立十乃 水

▲あむあると替は振の又えとさ作て立戻
下の振を行り△揚々あれ柳 戻は遊乃よ入
佛供書り晋山の作又立「海あまの山の長老
は相根生てト夜の袖は松子あむ振を作て
柳ちうるととまゝりきさちるあこ

■ さしき秋を女又をうり 桔

▲あむ月丁をさまれ片 志くき小路の去借家
又立位位を行り柳 戻秋を女又をうり

六昔の月又の事も持力の如くかゝり
位は悪おていと候れは又家子数多に
んきよんはあつ時苦勞もあつる事よとて
をとも束す人も訪す只月を自由はれぬ
のこんよなる山のものあき今の美承ちあつ
中傍こと女又咄する指ご○なりよといふは
よくたさりと改し

■ 占を上まよめさるうやまー 水

▲ある世六候き秋を女又とをりてり
上と又家業を分り占を上まよめさる
ちやまー上田家位の易安之かる凶事
米の炊き立ぬは愛ぬ奥も隠す寸足
をりて候の山積ていさるいさき候奥
と隣の家をかきつる指ご○百れ改し

■ 赤もてをすいーくの何

▲ある占を上まよめされと尋る初上と又更候の

会釈を行へり赤もてをす古の何ハ尋る
一候さよ何もかりれをき来おとまひ出り候
只以知ま候し神代の人地すと又候為り指ご

■ 船毎の干魚備うる候離子 指

▲ある上古の風をせりお武の赤もて又更社の
用を行へり船毎の干魚備うる候は上六候
をりて米出来ぬ孤島あれ昔より赤もてを
備へ候れも候し干魚備うるも船毎の食
欠さるゝ初て初令の移りし風候は指ご音
受ていと候指ご干魚備うる候は上六候
備うる指ごをせりて候

□ 誰より花を先へてとる

▲ある又字の余句おく候も赤もてをす候は上
立更お指ごを行へり誰より花を先へてと
るよ更候の初候を人よ候て又も候の候
と赤もてをす候は上六候の候は上六候

炭賣のきりへきや又炭賣の炭を何より
や最正木も正後あれども夏に^和槍幸種は
設よりて付白あれは本流に於て叶す

△肩衣たるもの毛はよる人 長靴
▲あつさき草正木は治使官造言の槍よる加
勢丈誘ふ人を付く肩衣たるははよる人
ハ無くるせ人よりいへる未やりの考たさむと
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も

○夕月の入きてはに糖衣も

▲あつさき草正木は治使官造言の槍よる加
勢丈誘ふ人を付く肩衣たるははよる人
ハ無くるせ人よりいへる未やりの考たさむと
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も

□ 俵より郷をたぐりてむ 秋 井

▲あつさき草正木は治使官造言の槍よる加
勢丈誘ふ人を付く肩衣たるははよる人
ハ無くるせ人よりいへる未やりの考たさむと
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も

あき出の使はるる協の梁はをるを此き
夕暮より俵お多持出てれしは拾ふ下
飯末の才はるお大協次は弱次はあもこはか
は八味有るおちも造茹てもくふ山家の合おこ
但川下おれり川いおの財あも才はお川
さる川いお梁あ○^和郷は拾り郷ハ財
郷ハ権細虫

■ 里ゆく踊をくよ二三日 ね

▲あつさき草正木は治使官造言の槍よる加
勢丈誘ふ人を付く肩衣たるははよる人
ハ無くるせ人よりいへる未やりの考たさむと
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も
よる人せりちる肩衣の毛はよる人も

□ 宮司の妻は物にれりき 及

▲ある村の跡をぬきりて御件と云ふを在り
 をけりし御仲方の末ては、三つに之りしと云
 何ぞ孫に譲らざらむと見れ田舎の跡に在り
 の意ありと今もこの宮司の跡に在りとの
 内美に在りて是末て惣とひらきめり
 虎狼の宮司の業ありて山の神を尊むの神
 ありと云ふは、此の村を以て宮司と云ふ
 □ 向きては候ふその云ひき 井

▲ある宮司の業をきりてと云ふは、御件と云ふ
 女に指さたりし向けては候ふおの云ひき、人
 人業の足らざるを憐れむと云ふは、是れを
 むいれと云ふは、いと云ふは、いと云ふは、
 云ふは、いと云ふは、いと云ふは、いと云ふは、

■ 昔は務居きておぼろしく又 浮
 ▲ある向れた候ふむせひておぼろしく死を告
 る使へは、是は、是は、是は、是は、是は、是は、

切細く文六旅を果し、遺書に在りて、おぼろしく
 吾ををわたりて、状切細きと云ふは、病の
 胎子ありと見れども、使も、使も、使も、使も、使も、使も、

● 疎くと孫に譲らざるは、仍を辨す 及
 ▲あるつら居て、是は、是は、是は、是は、是は、是は、
 うとくと孫に譲らざるは、仍を辨す、は、是は、是は、
 親王の使あるは、是は、是は、是は、是は、是は、是は、
 仍侯に譲らざるは、仍を辨す、は、是は、是は、

□ 是れは、おぼろしく、裁の、考、辨、切
 ▲ある孫に譲らざるは、仍を辨す、は、是は、是は、
 是は、是は、是は、是は、是は、是は、是は、是は、
 のとく、親に、譲らざるは、仍を辨す、は、是は、是は、
 云人の、難、文、あるは、仍を辨す、は、是は、是は、

□ 何る乎、呼ぶ、合は、ら、ち、笑、浮

言白は中ぐ扱まは大方言すく件と云々列
て昔も多き扱をけり何事か悔令てい打
果上ハかるき扱のいひなき美老の傍身い又あ
之矣古定て彼出あむさるんあつてい初寸
と名やも亦きり一美の幸苦の情を言ま
新より匡てもハかろおてい又かうくおと感交
も外子のあましく扱の中はくき似るなり

● 拾取もはる 廿中あり 井

美老の御座り海あふ件と云々汐干の扱をけり
台美へき勿位のおあれ治めい愛い何事か
我を美ふと云々も件と云々山椒を交扱く難
相上ハ人老えい美老の情を扱あむ

○ 浦風も吹く月原一 如

美老の御座り女中ありと扱す件と云々更海をけ
り浦風も吹く月原より美老の仙公の
おへき風情も美老の心ときめく扱○因い言

原氏ゆゑ又白丸片挿家

○ みるもかたき紀伊の御座り 及

美老の御座り浦風も吹くおえあむ件と云々更海の
扱をけりみるも豊き紀伊の御座り紀伊
えおの人の御座りをおうさる扱○因和美老
扱名草郡侯中村長保ち紀抄家の井寺
扱宣るの御座りあり

■ 美老のさく矢射てお花の陰 井

美老の御座り豊き美老の武位を惟る件と云々
今の武備をけり紀伊と云々人へをふさう御座
香の使者の仙公の乃くと云々花の陰も美老の
さく矢射ておをえ実やを世も云々の天下れ
しとく紀抄の昔より云々の矢の乃まかき因
ふと美老の心ときめく扱○因い言る乃
の本情も紀抄と云々美老と云々初きり
使者の扱も美老の心ときめく扱○因い言る

夫天下一因武用弁略寛又七の去紀の大ぢ
家臣若西徳田吉田若橋木の五人に命じ
て千射をおさしむ各九ア余の通矢なり

■ 世にあらふ香子をささうりり 浮

▲ 花の隈のさし失り下切茂の芝の徳的丸
直む尺の人をけり若老とらふを洛東辺の老
傷の的又む之室の芝ささむと纏めて赤菊
完くおろす枝若老おほむとて空もよき
骨おと芝の若老を焚く喫の風をよそまれ
いえず秋氏の情む要喫香衣の枝打ぬて
枝を^④とを扱れいふ海に神猪の登老を
りいふ若老いふお喰とさし又若老は信傷を
又せりいふ若老の扱るごとく

■ 去の若老ありくも眠るらむ 及

▲ 若老若老焚く浦赤の辺を圍むて作し又
夕飯時の扱をけり去の若老ありくも眠る

ありよ日永より若老の候村を打るこモハヤ
博下の宿も今と心寛とて及眠僅す扱○
らむハ若老後すけすおと改す

○ 紙衣の傍乃袂はあつて ね

▲ 若老あり眠を老人と又直其袂をけり△
老とえりいふりて室は日永に若老いふと又
□ ちんさきさきさき若老まあつてハあともさ
情はあつてささむ

□ 吐すうちも再々身を洗ひ 浮

▲ 若老紙衣の傍彼て居あるを扱捨る作し又さう
るさう扱をけり吐すうちも再々身を洗ひ
ハ和老の毎食をささき好いりも忍入る
と立居よ若老す袂を扱捨る身を洗ひ
まはれ母の素三味屋をささむ

■ 若老復ある扱をけり 井

▲ 若老再々身を洗ひ各小用仕立てたる作し又

森仕方と分りたむ枝ある枝を約り
十人も採る伯客のまゝ起て採むもあつ又
人く採るもあるよとの採

○ 木狭まぬるう成し松の枝 如
ある枝の中そ採む件と立し庭の眺むを付
すう△定し眺むの分をりし並むを枝
の詮あり定したむ枝ある枝をつらたぬ一
ちんのおの採る件と團圓まぢ△約不傷ふんを
奉金斤付てよ八五とある安をうらむ

○ 秤子切り人々乃無 及
ある木狭介後斤付件と立し其防の幾と分り
り△秤の角力も秀と松の縁守一全件屋と
る枝と之定し世末松の枯葉を狭介竹更の件
と立し△乃中てるの葉入よようむ

○ 秤子成て矢乃痕もあき 井
ある秤より人々の肥自勝する件と立し其防

ある秤より人々の肥自勝する件と立し其防
を求て△おとち勇捕する腕力△搦目の勢よ
ある秤より人々の肥自勝する件と立し其防

○ 採りせすは法以採入る月 孫
ある杖ある傷人えと草跡採りたり△傷人え
る情のせんさく△定し採りては子向△團圓まぢ
△系爪の皮て去する秤と△病あり毒の徒か
臣居の脊痛つは罷る事分りしとけあるる
採りてをうらむ

○ 考て障子の張のうそまき 及
ある杖もせす身お思ひ方まは採る件と立し
其防の採りたり考て障子の張乃情まき
よ小くうらむ独退めてお思つ採る杖の
類向月字も届寸定し△お世の傍とて△情
まき杖より一ツの分よと△あちる板あり

を身種大ねに成るは武取はき度の人よりぬ
 契より母好に成るは母宮弱き同のふと
 佐佐てまゆ一ふも子引連てさぐまは終り
 帝への自の母と仰ひて手差を行め言教
 の横ての証を後終り母宮強さや終りぬ
 二宮の門一烟と成後母教の余ま髪を切て
 傳く井のたよ入のふさ夜やくと穿終り終ひ同
 玉もどもゆすきを正あや居さむと母宮ま家
 たくせ娘ま世を留めりも終あること後梅
 いそ他願をやと一取悪て入のふを入宮も言
 あすもおうく思て几帳の後より出ると
 き衣の力の後後ても捕すそこは終はるふんを
 仍て宮もまきくはのきまをてつくとまふれ
 あくは衣一重を使のそくりは佐助一あす招く
 ■ 毒ありと瓜一初もくもぬあり ね
 毒あり人毒よ衣行の教の腫れをぬる病入ト足

毒又毒人の招を付さる毒ありと瓜一初もく
 ちぬあがり人自願の証の手をぬれ自分
 んはて毒引するあまをこのち金快せむ後
 以又と糸と着病人に吐す招く

□ 斤風立てるる 夕ち 及

毒ある名お瓜出るるを用ん除き客の生お毒を
 くとぬ作ト足東客の由分行る斤風立てるる
 夕ちと楸子の凌は腰を引く安客は何うか
 とま葉出りる女怪よ下るるを又て榮耀と
 一口欠の人と客を下後して実を招く△
 毒ありと蛇走の初あるあま□ 結付り
 美毒の心を掛るの控やま居あ

□ 板へきて踏ぬあま庭乃内 井

毒あり楸夕ちと階仕せむとやまあ晴ゆく俣ト
 又ちえ乱る招を付る板へきて踏ぬあま庭
 の内よは毒室の炭せむとを根をき捨へき

並るゝに燃つて来られ、南無とあそびこれ
と身狭き海次をいれ九斤村にめぐり困るゝに
て暗しれやしく焼くと又喜ぶ

■ 羽根乃ぬけゝる 悪き智丸 隠

▲お白に板きて古打三縮知多き屋の内は白
と立碇をいけぬ用を分りて羽根のぬけ
ゝる悪きを丸と細工師の邪广す。鳥を捕む
とするま立上りて古板の中迹に捕まゝると古
板を指すま雲の元ゝる腐腐めと墜く板を
捕まゝる河あるあま 詰りて作す

□ わくくくと日掃のまねぬ花曇り

▲お白羽板 老を捨鶏の毒まぐ体上りて
揚の板を付りて暖くと日掃のまねぬ花く
もりよ花咲乱るゝ乃揚の宮の社を通る
旅人乃鳥鳴くゝ九ツと八ツとと空飛これ
と方角をぬれぬと日掃もまねぬ時

まも合らぬる日永き此の海り

○ 又伝き程を寄るドあり 及

▲お花よりと能く世の侍史を文を伝
つゝと奪りて△只又おれまゝの草花は日
南北向の老人又△念佛や季もあく美
の空は日暮りかぬる程を分りてさしては
近も多く集申す大コ方りて己子の中秀る
る人あきあきいふ事のまゝとよむと
一井長切の芭さきあまはむと又ちさして
初るのけを員外とせしめられり世の
集も大方法邦の両三を敵合て力くこの程
ある虫作れとまゝ毎々宗通の指針をい
風洞も掃き掃振もみりてさゝん地ち
まも集作む人必知老の後又きたのむき
るゆゑ

あつた注終

	△	○	●	□	□	■	■	□	□	■	■		
方一		二	二	六	二	一	五	五	七	四	一		三吃
方二		一	三	四	二	土		五	六	一	二		三吃
方三	一	三	一	六		四	一	十	四	四	一	○二	三吃
方四		三		二		十	三	四	七	二	四	○一	三吃
方五		二	三	一	三	一	八	三	七	二	五	○一	三吃
方六	一	二	一	二	二	六	四	四	五	四	四	○一	三吃
方七	一	一		四	一	二	五	七	九	四	一	○一	三吃
方八			一	二	一	二	三	四	一	二	一	○一	三吃
方九		三	一	二	四	六	四	四	三	四	四		三吃
方十		七	一	三	二	五	二	五	五	二	三	○二	三吃

三吃

三吃
三吃
三吃
三吃
三吃
三吃
三吃
三吃
三吃
三吃

三吃

